



# 世界遺産としてのシルクロード

## 日本による文化遺産国際協力の軌跡

文化遺産国際協力コンソーシアム



# 序 文

2014年6月、カタールのドーハで開催された世界遺産委員会で、近代の産業遺産でもある富岡製糸場とともに、中国とキルギス、カザフスタン3国が申請した歴史的な「シルクロード：長安―天山回廊交易路網」が世界遺産リストに登録されることが決定された。

長大なシルクロードを国境を越え、包括的な形で世界遺産に登録し、中央アジアに平和構築の礎を築きたいという平山郁夫（文化遺産国際協力コンソーシアム初代会長）が提唱した壮大な理想の一部が実現したことを喜びたい。それは同時にわが国がこうした潮流に今後どのように対処してゆくか、大きな課題も投げかけられたともいえる。

1960年代から70年代にかけて、中央アジアが持続的な平和に恵まれた時期、シルクロード・ブームが世界を席捲し、多くの人びとが旅にでるとともに、シルクロードをめぐる出版物は、学術的なものも、ポピュラーなものも等しくおびただしく世に送り出された。

しかし、1970年代の後半になって、中央アジアが政治的に不安定な時期を迎え、とりわけアフガニスタンで戦争が勃発するや、ブームも消え去った。戦乱が人類の記憶と歴史の遺産・精神の糧に黒い覆いを掛けたといえる。

それからほぼ半世紀を経て、中央アジアはそれぞれがこれまでとはまったく異なった政治体制のもとで自立し、世界史のなかに新しい歩みを刻もうとしている。この大きな転換期に、各国は同時に新しい国のアイデンティティーを模索し、過去の文化を見直し継承し、未来に引き渡す作業を積極的に進めている。

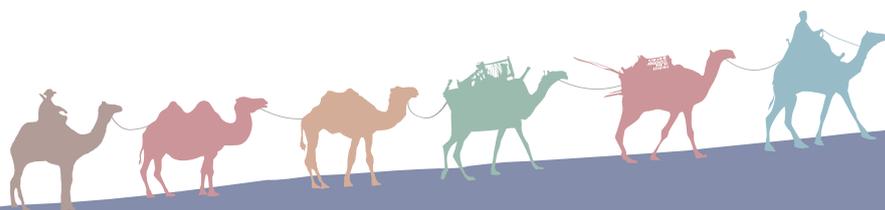
シルクロードの世界遺産への国境を越えたシリアル・ノミネーション（transnational and serial nomination）という問題が提起されたのは、2002年、ユネスコが西安において開催した「ユネスコ・シルクロード国際学術シンポジウム」以後のことだが、新しい世紀とともにこの気運は加速し、2006年と2007年には、シルクロードを人類にとって掛け替えのない文化遺産として捉え、「顕著な普遍的価値」を有するものとして世

界遺産に登録する基本的なコンセプトを作り上げるまでに至った。わが国も爾来、中国と中央アジア5か国が主催する一連の会議に参加し、その動きにそうかたちでユネスコ日本信託基金を有効活用し、中央アジア2か国（カザフスタン、キルギス共和国）において考古学と人材育成の両面で支援活動を展開してきた。とりわけキルギスのチュー川河畔にある古跡アク・ベシムでの発掘整理はわが国文化庁の拠点事業の一つとして継続され、キルギスの世界遺産登録に大きく貢献した。

これまでの日本におけるシルクロード文化研究の知的蓄積は誇るにたる高いレベルにあり、今日なおその蓄積は続いているし、いまや世界的になったシルクロード文化研究の推進にも寄与している。しかし、シルクロード文化の領域における日本の知的蓄積が、これまで包括的な形で発信されてきたとはかならずしもいえない。シルクロードが世界遺産として登録され、新たに東方シルクロードの検討が始まろうとしている時期を逸することなく、私たちは、歴史的名称であると同時に象徴的雅称でもある「シルクロード」のコンセプトの拡大・変容の経緯を視野にとどめ、シルクロードをより包括的に、1) 越境的な文化、2) 異文化共生の文化、3) 複合的・双方向的なダイナミックな文化交流の磁場、4) 日本を含むアジア文化の形成にとって不可欠な文化素（culturem）を有し、かつ重大な影響を及ぼした文化圏として捉えなおしたいと願っている。そしてシルクロードの世界遺産登録の過程において、わが国がさまざまな形で貢献していることを広く国民に伝えるとともに、シルクロードが「文化による平和構築」の新たなマトリックスとなることを世界に向けても発信することを強く望んでいる。

このシンポジウムの記録はシルクロードの世界遺産としての包括的登録を記念するだけではなく、その意義とこれからの展望を深く問いかけるために作成されたものである。

文化遺産国際協力コンソーシアム  
副会長 前田耕作

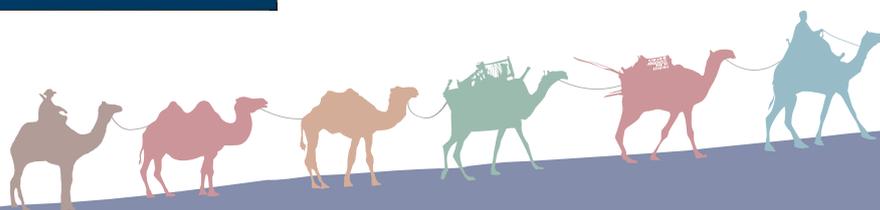


# 例 言

本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアムが2014年9月27日に開催したシンポジウム「世界遺産としてのシルクロードー日本による文化遺産国際協力の軌跡ー」の内容を収録したものである。原稿は録音音声をもとに書き起こされたものを、報告書の体裁を正すために編集者が加筆・修正を加えた。なお、講演1および講演2は、編集者の責任のもとに原文（英語）を翻訳したものである。報告書内で使用した写真のうち、出典の記載のないものはすべて発表者の提供による。

# 目次

序文	3
基調講演「シルクロード世界遺産登録への日本の貢献」	6
山内和也（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 地域環境研究室長）	
講演1「交河故城と高昌故城—シルクロードの真珠—」	16
王 霄飛（中華人民共和国・新疆ウイグル自治区トルファン地区文物局 局長）	
講演2「シルクロード：対話と協力の道」	24
ドミトリー・ヴォヤーキン（カザフスタン共和国・考古学エキスパートズ 代表）	
パネルディスカッション「シルクロードと日本」	32
司 会    前田耕作（文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長、和光大学 名誉教授）	
パネリスト    藏中しのぶ（大東文化大学外国語学部 教授）	
西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー）	
森本公誠（東大寺 長老）	
吉田 豊（京都大学大学院文学研究科 教授）	
附録 世界遺産としてのシルクロード（地図）	58



# シルクロード 世界遺産登録への 日本の貢献

山内和也

東京文化財研究所文化遺産国際協力センター  
地域環境研究室長

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました東京文化財研究所の山内です。今日は、「シルクロード世界遺産登録への日本の貢献」という題目でお話しさせていただきます(図1)。

「シルクロード」という言葉は、日本人のみならず、世界中の人々の好奇心や探究心をかき立ててきました。シルクロードの東の端に位置する日本、そして日本人は、つねにこのシルクロードを憧憬の眼差しで見つめてきました(図2)。中国、中央アジア、そして西アジア、地中海沿岸、いわゆるシルクロード沿いの地域ではいくつもの文明が興り、そして幾多の王朝が興亡を繰り返す、歴史にその名を刻んできました(図3)。また、そこに住む人びとはさまざまな異なる環境に適応するだけでなく、それを利用して生活し、多様な文化を生み出してきました。農耕、牧畜、狩猟を生活の生業とし、何千年にもわたって人びとが生きてきた舞台です。現在、私たちがシルクロードと呼んでいるものの始まりは、このような生活の舞台を繋ぐように、自然発生的に生まれてきた



1984年早稲田大学第一文学部(東洋史専攻)卒業、88年早稲田大学大学院文学研究科(修士課程)修了、92年テヘラン大学人文学部大学院(修士課程)修了。96年シルクロード研究所研究員を経て、2003年より現職。専門はイラン、中央アジアの文化史、考古学。アフガニスタン(バミヤーン)、インド(アジャンター)、キルギス(アク・ベシム)、タジキスタン、エジプト、ヨルダンなど、中央アジア及び西アジア地域で広く文化遺産保護の活動を行っている。



図1



図2

「道」でした。

「シルクロード」という名称は、もともとは19世紀のドイツ人地理学者のリヒトフォーフェンが、その著作である『中国』の中で生み出したドイツ語の「ザイデンシュトラーセン」、つまり「絹の道」に由来する言葉です(図4)。その後、スウェーデンの地理学者ヘディンが中央アジア旅行記の書名の一つとして用い、これが1938年に『ザ・シルクロード』の題名で英訳されたことで、「シルクロード」の名称が世界的に広く用いられるようになりました。

「シルク」、つまり「絹」はシルクロードの重要な交易品の一つでしたから、当然のように、この交易路の名称として選ばれたのでしょうか、これでは「絹」にやや偏り過ぎているようにも感じます(図5)。シルクロードでは絹だけが交易の対象であったわけではありませんし、絹が生産されるよりもずっと以前から人びとの交易の道は存在しており、絹に限らず、実に多種多様な「物」が、このシルクロードと呼ばれることになるルートを通して

洋の東西に運ばれていました。

また、ゾロアスター教や仏教、キリスト教、マニ教、イスラーム教といった宗教もこのルートに沿って伝播し、広がっていきました(図6)。言うまでもなく、人間が生み出した技術、古くは青銅器や鉄器といったもの、さらには天文学、薬学、医学といった科学技術もまたこのルートに沿って広がり、人類共通の財産になっていったのです。

さらに言えば、「シルクロード」という名称は、ややもすれば、交易というものが先にありきという印象を与え過ぎてしまうようにも感じます。交易という活動が先にあったので、そのために町が生まれたかのようなイメージが強くなってしまい、その土地土地に住んでいた人びとの存在が見過ごされてしまっているような印象を受けます。

ユーラシアに広がる、異なる、多様な自然環境の中で生き抜いてきた人間、そうした人間が住む場所があったからこそ、それらの集落を繋ぐように道が生まれ、そ



図3



図5

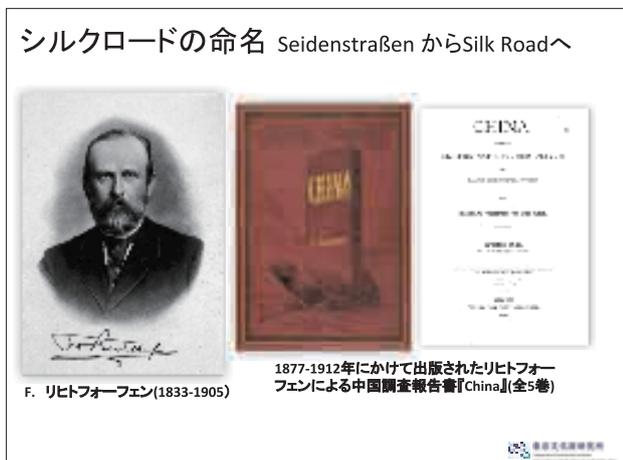


図4



図6

のような短い距離の道が連続的に繋がることによって、「シルクロード」と呼ばれる東と西を結ぶ何千キロにも及ぶ道が生まれたと考えるのがより適切だと思います(図7)。そして、そこに生きる人間こそが、物を運び、シルクロードを繁栄させていったと言えるでしょう。

「シルクロード」という名称がこれほど日本人の間に広がり、深い関心を寄せることになったのは、何と言っても、NHKのシルクロードという番組がそのきっかけだと思います(図8)。1980年、そして1983年から84年にかけて放送されたこの番組は、1980年代以降のいわゆる「シルクロードブーム」の火付け役だと言って間違いありません。はるかかなたにあって、言葉とイメージでしか想像できなかった日本人にとって、この番組は、視覚的に、そして直接的にシルクロードというものに触れることができた最初の機会となりました。

かつて私たちは、玄奘三蔵が著した『大唐西域記』を通して、あるいは明の時代に書かれた『西遊記』を通してシルクロードへのイメージを作り上げていたのかもしれない

れません(図9)。NHKの番組によって、シルクロードを映像で見ることができるようになり、日本人にとってシルクロードがより身近に感じられるようになりました。

私自身も、当時、シルクロードに憧れた1人で、大学で東洋史、そして考古学を学んだのち、シルクロードの国の1つであるイランに留学しました。とはいえ、まだあの頃は、中国の新疆、あるいは当時ソ連邦であった中央アジアに行ってみるといえるのは、夢のまた夢でした。それが、このたびシルクロードが世界遺産に登録になり、その登録のために日本が協力することになるとは、虹の橋を渡るような話で、私自身も不思議な縁を感じています。

さて、シルクロードの世界遺産登録ですが、そのきっかけをお作りになったのは平山郁夫先生でした。2002年11月、「ユネスコ・シルクロード国際学術シンポジウム2002」が西安で開催され、その閉幕に際して「西安宣言」が採択されました(図10)。この西安宣言にあわせ、平山先生と当時のユネスコ総会議長であるアフメド・



図7



図9



図8



図10

ジャラーリーさんは、連名で当時のアナン国連事務総長とユネスコの松浦事務局長に書簡を出しました。その書簡の最後は次のような文章で結ばれていました。

「特に、私たちは、ユネスコと関係する加盟諸国に対して、シルクロードを世界遺産リストへ記載することを熟考するよう求めたいと思います。これは、指名された世界遺産「遺跡」がそれぞれの国境を超えるものの最初の機会となるでしょう。この提案を前進させるために必要な加盟諸国が協力する、これ自体が国際的な協力の表明であり、そして人びとの間の対話への貢献となるでしょう。」

この書簡には、「国境を越えて関係する国々が手を取り合い、シルクロードを世界遺産に登録することによってシルクロードを平和と対話の道として現代に蘇えらせた」という平山郁夫先生の強い願いと思いが込められていました。

この会議から13年という歳月を経て、2014年6月、シルクロードは世界遺産リストに登録されることになり

ました(図11)。もともとは中国と中央アジアの5か国、つまりカザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの計6か国が共同で申請する予定でした。しかしながら、紆余曲折があり、今回は中国とカザフスタン、キルギスの3カ国が申請した「長安-天山回廊」のみが登録となりました。

ちなみに、ウズベキスタンとタジキスタンは「シルクロード：ペンジケントーサマルカンドーポイケント回廊」を共同で申請しましたが、残念ながら「情報照会」という決議になり、今回の登録は見送られました。また、トルクメニスタンは今回の共同申請には参加しませんでした。

このたび登録された「長安-天山回廊」は、洋の東西を結ぶシルクロードからみればほんのごく一部ですが、こうして、本日のシンポジウムを主催する文化遺産国際協力コンソーシアムの生みの親でもある平山郁夫先生の夢は実現したのです。

今年6月、カタールのドーハで開催された「第38回



図11

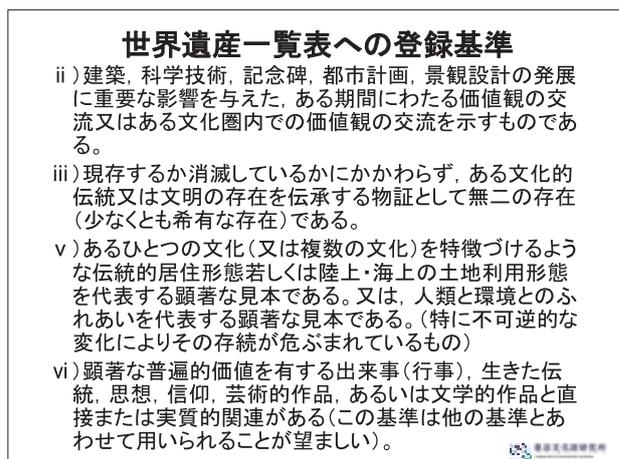


図13



図12



図14

世界遺産委員会」において、中国、カザフスタン、そしてキルギスの3か国によって共同で申請された「シルクロード：長安－天山回廊交易路網」が世界遺産に登録されました(図12)。世界遺産への登録の基準とされたのは登録基準2、3、5、6の4つです(図13)。

では、登録申請書に基づいて、今回登録されたシルクロードの概要についてご紹介していきます。

シルクロードはアジア、インド亜大陸、中央アジア、西アジアの古代社会を繋ぐルートであり、直線距離にして約7,500km、それぞれのルートをあわせると35,000kmを超える長さとなります(図14)。これらの内のいくつかのルートは数千年間にわたって用いられており、そのルートに沿った交易によって貴重な品々が運ばれるとともに、人や物の動きがシルクロード沿いの国々に政治的、社会的、そして文化的な強い影響を与えました。シルクロードによって運ばれた商品の中でも、もっとも有名なものが「絹」、つまりシルクで、中国からはるか遠く、東地中海世界までこの「絹」がもたらさ

れました。それゆえ、このルートがシルクロードと呼ばれるようになりました。

「長安－天山回廊」はこのようなシルクロードの一部で、距離にして約5,000km、それぞれのルートを合わせると約8,700kmに達し、中国の中原に位置する西安(長安)と中央アジアを結んでいます(図15)。このルートは、紀元前2世紀から紀元後1世紀にかけて中国の漢とローマ帝国を結ぶ交易路として形成されました。その後、6世紀から14世紀にかけてもっとも繁栄し、16世紀に至るまで主要な交易路として用いられました。

地理的にみても、異なる地域にまたがっており、海拔マイナス154mから海拔7,400mまでの高低差があり、多くの大河をまたぎ、砂漠から雪で覆われた高地まで、地形的にも多様な地域をカバーしています(図16)。また、気候の面からみても、厳しい乾燥地帯から半湿潤地域に至るまで、きわめて気候が異なる地域が含まれています。

「長安－天山回廊」は、黄土地帯に位置する漢代、そ



図15



図17

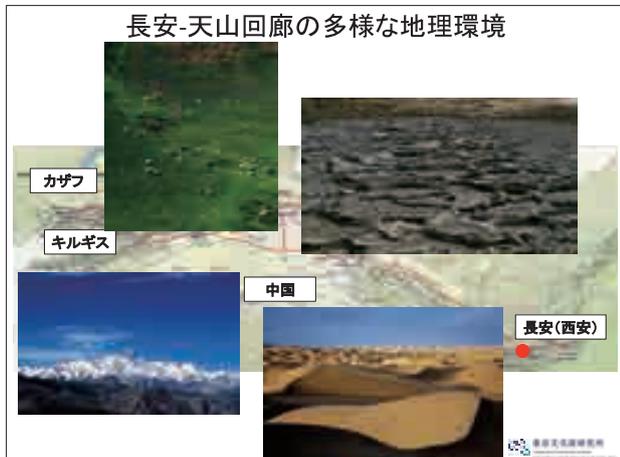


図16

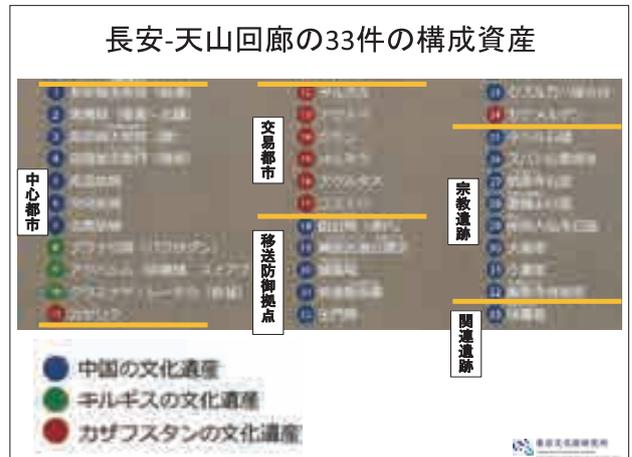


図18

して唐代の中国の都であった長安から西に向かい、河西回廊を通り、玉門関を抜け、そのうち、この回廊は天山山脈の北側と南側に位置する2つのルートに分かれます(図17)。これが、いわゆる「天山北路」と「天山南路」です。天山北路は、イリ地方を抜け、「ジェティ・スー」、ロシア語では「セミレーチエ」、つまり「7つの川」と呼ばれる地域に達します。天山南路は、ベデル峠を抜けてパミール高原にはいり、イッスィク・クルと呼ばれる湖の湖畔を抜け、チュー河が生み出したチュー谷に至ります。この2つのルートは、先ほど述べましたジェティ・スー地方の西の端でもう一度1つになります。

今回登録された遺跡、世界遺産の用語で言えば、構成資産は33件に上ります(図18)。これだけの数の遺跡を一括して登録するための努力は如何ほどであったかと思えます。33の構成資産は都などの中心都市、交易都市あるいは交易集落、移送および防衛施設、宗教遺跡、その他の5つに分類されています。

中心都市には、中国の洛陽や長安、あるいは新疆ウイ

グル自治区の高昌故城、キルギスのアク・ベシム、カザフスタンのカヤリクが含まれます(図19)。私たちは現在、アク・ベシム遺跡、古くは「スイヤーブ」とも呼ばれましたが、この遺跡で発掘調査を行っています(図20)。唐代の中国の西域の支配の拠点でもあり、唐代の詩人である李白が生まれた所であるとも考えられています。

次に、交易都市としては、カザフスタンのジェティ・スー地方の隊商宿、つまりキャラバンサライなどの施設が含まれています(図21)。移送および防衛拠点としては、おもに中国の遺跡が登録されていますが、日本の箱根八里の歌でも名高い函谷関、そして玉門関といった関所、あるいはキジルガハ烽火台といった施設などがあります(図22)。拠点となる中心都市や交易都市の間の交易路の安全を確保するとともに、管理するための施設でした。

宗教遺跡としては、中国に位置する仏教関係の8遺跡が登録されました(図23)。キジル仏教石窟や麦積山石



図19



図21



図20



図22

窟、さらには玄奘がインドから持ち帰った経典を納めた西安の大雁塔、あるいは玄奘三蔵の遺骨を納めた興教寺の舍利塔も含まれています。随分と仏教に偏っているように見受けられますが、キルギスのアク・ベシムにはネストリウス派キリスト教の教会がありますし、ゾロアスター教やマニ教、そしてキリスト教といった、シルクロード沿いの多様な宗教の痕跡が確認されています。今回登録された遺跡からは、シルクロードにおいてさまざまな宗教が信仰されていたことが理解されます。

「その他」のものとしては、漢の武帝が西方に派遣した張騫の墓が唯一登録されています(図24)。

こうしてみると、私たちにもなじみのある遺跡が多く、まだ世界遺産になっていなかったのかと思うほど非常に有名な遺跡も含まれています。一括で登録しなくても、単体、つまり1つずつでも十分に世界遺産としての価値を持っているのではないと思われるような遺跡も数多く含まれています。

中国、カザフスタン、キルギス、そして今回は登録に

なりませんでしたが、ウズベキスタン、タジキスタンは、2002年以降、断続的に会議を開催し、シルクロードの世界遺産登録に向けた活動を行っていました。登録に向けて本格的な動きが始まったのは、おそらく2006年のことだったと思います(図25)。2006年、中国のトルファン、続いてウズベキスタンのサマルカンドで「中央アジアのシルクロードの一括申請のための地域作業部会」が開催され、全体の作戦計画が採択されました。

この作戦計画に基づき、2007年、タジキスタンのドシャンベで会議が開かれ、「概念」に関する文書、つまりコンセプトペーパーが作成されることとなります。私自身がこのシルクロードの世界遺産登録の動きに直接的にかかわることになったのは、このドシャンベの会議からでした。たまたま別のプロジェクトでタジキスタンのドシャンベを訪れていたのですが、そのとき、シルクロードの世界遺産登録に向けた会議があることを耳にしました(図26)。はじめは一切情報もありませんでしたから、一体どういうことなのか、皆目見当もつかない状



図23



図25



図24



図26

態でした。ともかく会議に参加してみようということで、オブザーバーとして参加することになったわけです。

驚いたことに、その会議ではシルクロードの世界遺産登録の基本的な文書となる「コンセプトペーパー」を採択するための話し合いが行われていました。さらに驚いたことに、「コンセプトペーパー」では、申請にあたっての地理的な範囲として、西安から東の部分、つまり日本がまったく抜け落ちていたのです(図27)。登録に使う予定の地図についても同様に、その地図には日本の影も形もまったくありませんでした。そのときはオブザーバーでしたから、もちろん発言は許されませんでした。ただ、このままではシルクロードの概念そのものから日本が外されてしまう、シルクロードの東の端の国である日本が、シルクロードの一部とみなされなくなってしまうという強い危機感を抱いたことを憶えています。

これではいけないと思い、帰国後、さっそく関係者や関係機関と対応を協議することになり、「少なくともコンセプトペーパーにおいては、日本のみならず極東をシ

ルクロードの地理的範囲内に含めるよう修正を求めていくべきだということになりました。

翌2008年、西安でシルクロードの世界遺産登録に関する国際会議が開かれることになり、今度はオブザーバーではなく、正式なメンバーとして日本がその会議に参加することができました(図28)。幸いにも、日本の外務省のご尽力もあり、また、同じく会議に参加していた中央アジアの専門家の皆さんの支援もあり、さらには中国側のご理解もいただき、コンセプトペーパー、そして地図の修正が認められることになりました。学術的な問題ではなく、たんなる世界遺産登録のための書類上の問題ではないのかというご意見もございましょうが、このようにして、どうにか「世界遺産シルクロード」の概念に日本が含まれることになったのです。

後日談というべきでしょうか、この話には「落ち」がついていて、正式な申請書類に添付されているコンセプトペーパーはなんと修正前のもので、修正したものではありませんでした。



図27

### ユネスコ文化遺産保存日本信託基金 『シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業』

- プロジェクト概要

1. 枠組 ユネスコ文化遺産保存日本信託基金 『シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業』
2. 目的 中央アジア5カ国および中国が行っているシルクロード世界遺産登録を目指した活動を支援する。
3. 期間 3年間(2011~2014年)

図29

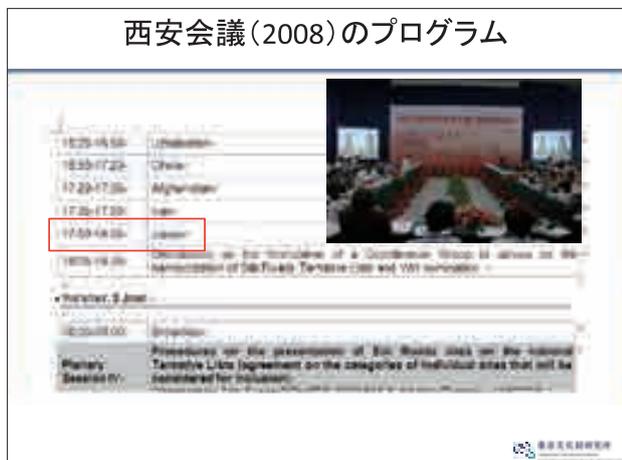


図28



図30

中央アジアと中国の地域会合、あるいは国際会議に参加している中で、各国の足並みが揃っていないことにも気付かされました。共同で申請を目指してはいるものの、それぞれの国の国力の差、あるいは専門家の存在、取り組みに対する意欲には差があり、まだまだ前途多難だと感じました。そこで、どうにかこのシルクロードの世界遺産登録に関して、直接的に中央アジアの国々に協力できないかと外務省に相談を持ちかけました(図29)。幸いにも、外務省もその意義を認識してくださり、ユネスコに拠出している文化遺産保存日本信託基金を用いて、2010年から中央アジアの国々の専門家の人材育成と技術移転のプロジェクトを開始することができました。

これが「シルクロード世界遺産推薦ドキュメンテーション支援」というプロジェクトです(図30)。このプロジェクトを通じて申請書類の作成に不可欠な記録の作成を支援することができるようになり、今回の登録に対しても大きな貢献をすることができました。このプロジェクトは、現在、実質的な活動は終了していますが、

第2期を計画中で、今回、登録に至らなかったウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンを支援する予定です。

異例のことだと聞いていますが、ドーハで開かれた世界遺産委員会の会場では(図31)、登録が決まったあとのカザフスタンの代表のあいさつの中で、「今回の遺産登録に関しては、日本より多大な協力を得ました。感謝申し上げます」という日本に対する謝辞が述べられました。これを聞き、この登録に私たちの協力が幾ばくか役立ったのかなと感じ、とても嬉しく思いました。

こうした登録に対する直接的な支援プロジェクトだけでなく、日本は、これまでシルクロード沿いに位置する文化遺産の保護に対して積極的に支援を行ってきました。先ほどご紹介しましたユネスコ文化遺産保存日本信託基金は、これまでも中国および中央アジア諸国の文化遺産保護のために貢献してきています(図32)。例えば、中国では、今回世界遺産に登録された交河故城と大明宮、また、クムトラ千仏洞、あるいはすでに世界遺産に登録



図31



図33

遺産名	期間	内容
交河故城 (中国)	1993年～1998年	保存マスター・プラン作成、断崖の浸食/崩壊防止、人材養成
大明宮舎元殿 (中国)	1995年～2003年	保存のためのマスター・プラン作成、基礎修復、広報資料作成
クムトラ千仏洞 (中国)	2001年～2009年	データ収集、実験・調査、マスター・プラン・保存計画の策定
龍門石窟 (中国)	2001年～2009年	データ収集、実験・調査、人材育成
ファイヤーズ・テバ (ウズベキスタン)	2000年～2006年	遺構の保存修復、覆屋の設置、ストゥーバの修復
オトラル (カザフスタン)	2001年～2005年	データ収集、人材育成、マスター・プランの策定、保存
クラスナヤ・レーチカ、アク・ベシム、プラナ (キルギス)	2003年～2006年	データ収集、調査、保存計画策定、緊急保存処置
アジナ・テバ (タジキスタン)	2005年～2008年	調査研究、マスター・プラン作成、仏教寺院の保存

図32

文化庁拠点交流事業(2008-2010):  
タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復

- 事業概要
  - タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所との共同事業
  - 人材育成・技術移転: タジク人修復専門家の育成
  - タジキスタン国立古代博物館が所蔵する6～11世紀の壁画断片の保存修復をおこない、展示を可能にする
  - 上記壁画を対象とした文化史、および絵画技法・材料の研究

図34

されている龍門石窟の保護にも協力しています。

中央アジアに目を向けてみますと、ウズベキスタンのファイヤーズ・テパ、カザフスタンのオトラル遺跡、キルギスのクラスナヤ・レーチカ、アク・ベシム、ブラナ遺跡の保護にも協力しています(図33)。このキルギスの3つの遺跡は、今回世界遺産に登録されました。その登録の申請書に用いられた地図は、この日本の信託基金のプロジェクトを通じて作成されたものです。さらには、タジキスタンのアジナ・テパの保護にも協力しています。

外務省だけではなく、文化庁においても、同じく中央アジアの文化遺産の保護に積極的にご協力いただいています。東京文化財研究所は、文化庁の委託を受け、これまで文化遺産国際協力拠点交流事業を中央アジアで実施しています(図34)。タジキスタンでは、タジキスタンから出土した壁画の保存修復を行いました。タジキスタンでは、発掘され、剥ぎ取られた数多くの壁画が収蔵庫に眠っています。それを保存修復し、博物館で展示しました。また、キルギスでは文化遺産保護に関する包括的

な事業を実施してきました(図35)。遺跡のドキュメンテーションから始まり、発掘調査、遺跡の保護、遺跡の公開と活用というように、遺跡調査から公開までの一連の活動を、今回世界遺産に登録されたアク・ベシム遺跡を舞台に実施しました。

世界遺産登録に直接的に貢献するものとはいえませんが、こうした事業で実施したワークショップには、その国の若手の専門家だけではなく、中央アジア5か国、あるいは遠くコーカサスのアルメニアからも専門家が参加しました。こうしたワークショップを通して、広く人材育成や技術移転を図るとともに、日本を核とした若手研究者の新たなネットワーク作りにも大きく貢献することができました。これもある意味では、シルクロード再生の一つということができるでしょう。

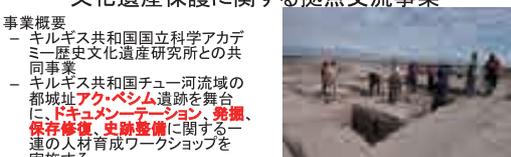
最後になりますが、シルクロードの東端に位置する日本、そして日本人はこれまでずっとシルクロードに憧憬の眼差しを向けてきただけでなく、つねに変わらぬ深い関心を寄せてきました。人間の交流を跡付ける道、それがシルクロードかもしれません(図36)。しかしながら、それが過去の遺物であってはなりません。今回のシルクロードの世界遺産登録が、平山先生が望んだように、シルクロードがいま一度、人びとの交流、そして対話の道として蘇ること、そして平和への礎になることを希望しています。

ご清聴、ありがとうございます。



文化庁拠点交流事業(2011-2014)  
 キルギス共和国および中央アジア諸国における  
 文化遺産保護に関する拠点交流事業

- 事業概要
  - キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所との共同事業
  - キルギス共和国テュー河流域の都城址「アク・ベシム」遺跡を舞台に、ドキュメンテーション、発掘、保存修復、史跡整備に関する一連の人材育成ワークショップを実施する。



発掘実習



金属製品の保存修復実習

図35





ローマ 長安(西安) 奈良

平山郁夫画伯(1930~2009)

図36

# 交河故城と高昌故城 —シルクロードの真珠—

王 霄飛

中華人民共和国・新疆ウイグル自治区  
トルファン地区文物局 局長

交河故城と高昌故城は、中国・新疆ウイグル自治区の天山山脈南麓、トルファン盆地に位置する歴史的に主要な都市です(図1)。両都市は、シルクロード上の交易を護るうえで戦略的に重要な位置づけにありました。歲月を経て現在は廃墟と化していますが、壮大な城壁、橋台、大寺院や宮殿、大通り、行政府の建築物などは、シルクロード沿い地域の経済、都市建築、宗教をはじめとする多様な文化を映しだしています。交河故城と高昌故城は、シルクロードの東西交易の中継地、合流地点として発展してきました。

## 交河故城

交河故城はトルファン市から西方約10 km、ヤルナイズ谷に囲まれた柳葉形の特徴的な形状をした自然の台地上にあります(図2)。台地の最大長は約1,750 m、最大幅300 m、全体面積は約37万6,000 m<sup>2</sup>で、そのうち建築面積は約22万 m<sup>2</sup>を占めます。台地の断崖は最大で30 mあり、都市を囲む天然の障壁を形成しています。

現存する交河故城内の建造物群は、各時代の建築様式や特徴などの痕跡をとどめています。都市全体の構造は、中原地方の都市構造と類似しています。町の中心に行政府の建築物があり(図3)、大通りは輸送目的のみに利用されるため、建物の出入り口は大通りに面するのではなく脇道に面していました。一方、中央アジアの典型的な都市と融合した構造も見られます。すなわち、都市の正門と、もっとも大きな仏教寺院の中心部は、真っ直ぐな大通りで結ばれています。世界の建築史上の奇跡といわれている大通り(図4)や大仏教寺院(図5)、巧妙に設計された行政府の建築物、美しく整備された居住区(図6)、堅固な東門(図7)、整然とした塔林(図8)は、すべて古代の交河故城が活気に満ち、栄華を誇った仏教文明の中心地であったことを物語っています。

図9は、著名な画家、吳冠中先生が描いた交河故城です。これは存命中の中国人画家の作品として最も高額で、2007年、香港のオークションで4,070万中国元で落札されました。そのような高値がついたのは、作品自体の芸術的価値に加え、偉大な歴史を描写しているためです。交河故城は、紀元前2世紀から14世紀の間、シルクロードの重要な都市でした。紀元後1世紀に車師前国の都になり、その後、高昌王国、唐代、そして天山ウイグル王国統治下では地区や県などの区画に位置づけられました。640年、唐朝は交河故城に安西大都護府を置き、行政、軍事、宗教、交易拠点に転換させることで天山山脈南麓やトルファン盆地を支配しました。



1979年生まれ。2009年南カリフォルニア大学文学研究科博士後期課程修了(博士号、歴史学)。2011～2012年中国国家図書館国際協力課長を経て、現在は新疆ウイグル自治区トルファン地区文物局長。現職では、文化遺産の保護とトルファンにおける学術研究の推進、文化遺産関連の教育計画への参画奨励に従事。専門は歴史学。



図1 長安—天山回廊の経路網



図2 交河故城



図3 行政府のオフィス



図4 大通り



図5 大仏教寺院

独特な形状の天然の台地に建設された交河故城の特徴は、自然景観をいかした都市構造と見事な建築美にあるといえます。多様な環状建築物だけでなく、墓地や石窟もあります。それらは、シルクロード周辺を数多くの民族集団が行き交い、多様な都市文化、建築技術、民族文化が交流したことを示す物理的証拠となっています。

交河故城の建設には多様な建築技術が用いられています。たとえば、版築泥法、版築夯土法、地山削出し、半削出し工法が見られます(図10)。また、故城内とその周辺地域からは多数の仏教関連遺物が出土していますし



図6 居住区



図7 東門



図8 塔林

(図11)、トルファンは非常に暑く乾燥していることもあり、今日まで古文書も多数良好な状態で遺存しています。

### 高昌故城

高昌故城はトルファン市から東方30km、火焰山南麓に位置し、面積198ヘクタール、周囲5.4kmのいびつな矩形形状です(図12)。版築による高くて厚い城壁を有する外城(図13)と、内城、可汗堡(砦)(図14)で構成されています。このような三重の都市構造は、中原地方の諸都市と密接に関連しています。高昌故城の宮殿跡や僧院跡からは磁器や貨幣、仏教やネストリウス派キリスト教、マニ教の壁画や経典が出土し(図15)、これら遺物は、高昌故城がシルクロード沿いの政治、経済、交易、文化、宗教において重要な役割を担っていたことを物語っています。また、出土遺物のなかには中原地方で広く用いられた五銖銭があり、シルクロードを通して広く交易が行われていたことがわかります。

図16も中国の吳冠中先生の作品です。高昌故城は平坦な地形、穏やかな気候、そして水に恵まれており、前漢および後漢の時代には西部に戊己校尉が設置されました。高昌の司令官が東域の秦朝に向かっていたのです。その後、さまざまな民族が集まるにつれ人口が飛躍的に増加し、トルファン盆地の政治、経済、および文化の中心拠点となりました。中原地方の高度な農具や農業技術などが伝搬し、農業は急速に発展しました。高昌は使節や隊商に生活必需品を提供し、シルクロードでの交流を



図9 吳冠中画伯による交河故城の絵画



図10 建築技術



図11 出土遺物



図12 高昌故城



図13 外城壁

支えていました。そして、漢文化と車師文化は完全に融合し、中国文明はさらに豊かなものになりました(図17～19)。

### 交河故城・高昌故城の保護に向けて

交河故城、高昌故城と、両遺跡からの出土遺物は、現在、トルファン地区と新疆ウイグル自治区が保護・保存



図14 可汗堡



図15 出土遺物



図16 吳冠中画伯による高昌故城の絵画

しています。私の職場の一つトルファン博物館には、一日あたり何千人、時には数万人が訪れています(図20)。

私たちは、交河故城、高昌故城だけでなく、交河故城と高昌故城の周辺地域(バッファゾーン)も管理しています(図21、22)。このバッファゾーンにはいくつかの村が含まれ、全体で51km<sup>2</sup>に及びます。この地区内では、交河故城や高昌故城を保護するため、あらゆる種類の建造物の建設や事業が制限されています。

自治区はこれらの2つの都市の保存・保護計画を推進



図17 大仏教寺院(内観)



図18 仏塔



図19 ネストリウス派キリスト教の壁画

するため、優秀な専門家を集めて管理計画を作成しています(図23)。その作成に関連して、発掘調査などの面で受けた国際協力は非常に有益でした(図24)。

私たちは、中央政府、自治区政府、市、そして地元自治体からも多大な支援を得ています。遺跡を保護・保存するためには地元住民とどのような協力ができるか検討するため、何度か会議を行ってきました。また、西安、敦煌、北京そして南京の機関とも保存事業を推進するために密接に連携しています。地域社会の参加も、故城の保護活動を前進させる大きな要素です。文化遺産を保護すべき方策を話し合うため、集会や講義も実施しています。市は、地元農家に文化遺産保護に関するハンドブックを作成し、配布しています(図25)。調査研究は、2つの故城の保護に関する最善の方法を策定するうえで大いに参考になります。トルファン学研究院には専門家と博士研究員も在籍しています。また、トルファン学を専門とする研究者が中国全土から集まり、長期的に交河故城・高昌故城の研究を支援するための委員会を設置しています(図26、27)。これまでに委員会を4回開催しており、来月(2014年10月)には第5回の開催を予定しております。



図20 トルファン博物館

最後に、交河故城で実施された重要な保護事業をご紹介します。山内さんの講演にもありましたとおり、1990年代、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金は交河故城の調査研究と保護のために100万米ドルを拠出しました。それにより、重要な成果をあげられたことをトルファン地区文物局を代表して、日本の皆さまに御礼申し上げます。

シルクロードは、何世紀にもわたり、東西の文化と民族の交流に重要な役割をはたしてきました。シルクロードは交易、繁栄、友好、そして希望の道です。最近、中国の習近平国家主席が「シルクロード経済圏」の立ち上げを提唱しました。この構想は、中国国内外で歓迎されています。文化はシルクロード経済圏を形成するうえで



図21 交河故城のバッファゾーン



図22 高昌故城のバッファゾーン



図23 管理計画



図24 国際会議の様子



図25 地域社会の参加

22 世界遺産としてのシルクロード



図26 トルファン学に関する国際研究会



図27 トルファン学の刊行物

非常に重要な力となります。歴史は地理的な距離にかかわらず、異なる文化を有する人々が文化の伝達や経済発展のために交流できることを私たちに教えてくれました。だからこそ、本日のシンポジウムは重要であるといえます。本シンポジウムでは、関係機関の皆さまだけでなく、

シルクロードを知るため、またシルクロード文化遺産の保護を支援する皆さまが一堂に会することができました。トルファンは素晴らしい街です。素晴らしい文化、気候、そして友好的な人々があります。機会がありましたら是非、トルファンにいらしてください。



# シルクロード： 対話と協力の道

ドミトリー・ヴォヤーキン

カザフスタン共和国・考古学エキスパート代表

シルクロードの世界遺産登録を支援して下さった日本の皆様に最大の感謝の意を表しまして、私の講演を始めさせていただきます。世界遺産登録への道は長く険しいものでしたが、相互協力の喜びにあふれた道でもありました。

シルクロードにおける長安―天山回廊を最初の世界遺産として登録を推進する活動に、中央アジア諸国、日本、中国、ベルギーそしてユネスコ世界遺産センターやイコモスの専門家らが多数参加し、約10年にわたって支援を受けました。複数の国にまたがるシルクロード世界遺産推薦ドキュメンテーション支援は、多様な中央アジアの文化遺産を提示する視点から、もっとも将来性のある複合的なプロジェクトでもありました。同時に、推薦書類の準備や数多くの推薦遺産の将来的な管理という観点では、もっとも複雑なプロジェクトでもあったといえます。アシガバート合意では、「この大掛かりで、非常に複雑なプロジェクトは、これまで世界遺産委員会に提示された案件のなかでも最大規模の関連遺産の推薦となる可能性がある」と述べられています。シルクロードの世界遺産登録の実現は、体系的で継続的な国際的支援があったからこそ達成されたといえます。また、高い国際水準に達するため、国際的な専門家が開与し、世界遺産登録へ向けて制度・方法を整備したことも実現の基礎になりました。日本はこのプロジェクト達成の過程で重要な役割を果たされました。

シルクロードは東西の統合、交易、対話の道であり、約2千年にわたる文明繁栄に大きく貢献しました。シルクロードには、それを構成するものの集合体であるということ以上の意味があります。単にモノが移動するだけ



1976年生まれ。1999年アルファラビ・カザフ州立大学にて修士号取得。2005年よりカザフスタン考古学研究所文物保存部門長、上席研究員。2006年よりカザフスタン国内の考古学研究分野における学術組織を指導するNGO考古学エキスパート代表。シルクロード世界遺産登録プロジェクトユネスコ推進委員。カザフスタン共和国世界遺産委員会委員（2013年～2017年）。2010年カザフスタン考古学研究所にて博士号取得（歴史学）。

専門は考古学における先進コンピュータ技術、シルクロード、中世考古学、イスラーム考古学。



図1 ホジャ・アフメド・ヤサウィー廟とタムガリの考古的景観にある岩絵群

ではなく、仏教、ユダヤ教、イスラーム教、キリスト教、ゾロアスター教、マニ教も伝搬しました。科学や技術もシルクロードを通じて広められました。中国から紙や火薬、方位磁針などが伝えられた一方、中央アジアや中東地域、地中海地域、西欧諸国からは建築（特に橋の構造）、絹やブドウの栽培にかんする技術が伝えられました。諸外国と交易するため、外交使節団も同じ道を行き来していたといわれています。

カザフスタン共和国には何世紀にもわたる歴史があり、世界的な文化遺産の一所有者であるといえます。文化遺産（遺跡）の多さとその多様性から、カザフスタンは中央アジアの野外博物館と称されています。

カザフスタンの文化遺産は、この地に居住してきた人々によって残されたあらゆる文化を吸収してできたものです。カザフスタンには25,000以上の文化遺産（遺跡）があり、2,056,000以上の文化遺産がさまざまな展示室や収蔵施設に保管されています。国立博物館が89軒あり、3,495軒ある国立図書館には延べ6,684万点に及ぶ本や貴重な手稿が納められています。

### カザフスタン国内のユネスコ世界遺産

1991年4月29日、カザフスタンは「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」を批准し、2003年の第27回世界遺産委員会でカザフスタンにおける最初の世界遺産が登録されました。それ以降、世界遺産に登録されたのはホジャ・アフメド・ヤサウイー廟とタムガリの考古的景観にある岩絵群の2件のみでしたが（図1）、そこから出土した黄金人間やオトラルは、カザフスタンの文化を象徴するものとなっています（図2）。

現在（2014年）、世界遺産リストには161か国1,007

件が記載されています。その内訳は文化遺産779件、自然遺産197件、複合遺産31件です。締結国別にみると、イタリア50件、中国47件、スペイン44件、フランス39件、ドイツ39件、メキシコ32件、インド32件、イギリス28件、ロシア26件、アメリカ22件です。カザフスタンは世界で9番目に広い国土を有しているにもかかわらず、現時点で世界遺産リストに記載されているものはわずか4件、世界遺産登録件数全体の0.4%にすぎません。

ここからは、カザフスタン国内に位置し、世界遺産暫定リストに含まれている文化遺産のうち、シルクロード上にある8件の遺跡を紹介します。これらはカザフスタンの真珠と称されています。

#### (1) カヤリク（図3）

カヤリクはカザフスタン南東部にある大変有名な遺跡です。遺跡の中心部は1km以上に及んでいます。数年にわたる発掘調査により、膨大な文化遺産が出土しました（図4、5）。この都市で注目すべきことは、ある一定の時期に仏教寺院やイスラーム教モスク、マニ教寺院、キリスト教教会など多数の宗教施設が検出されたことです。宗教に寛大な街であったといえます。

もちろん都市文化も大変発達していました。たとえば、ハンマームという中東によく見られる公衆浴場があります。また、西遼時代の印章や中国の貨幣が遺跡内から出土しています（図5）。

#### (2) タルガル（図6）

タルガルはさまざまな金属交易の中心として知られる都市です。12世紀時点で、地元の職人たちはダマスカス鋼またはウーツ鋼といわれる、るつぼ鋼を製造するほ



図2 カザフスタンの文化を象徴する文化遺産



図3 カヤリク

どの技術を持っていました。興味深いことに、るつぼ鋼を製造するだけでなく、彼らは、はさみのような日用品も製造していました。

(3) アクルタス (図7)

西から東に向かう道の途上にあるもう一つの遺跡がア

クルタスです。アクルタスには、142m×160mもある巨大な宮殿があったとされています。この宮殿は、8世紀頃にアラブ人によって設計・築造されたと考えられています。



図4 カヤリク

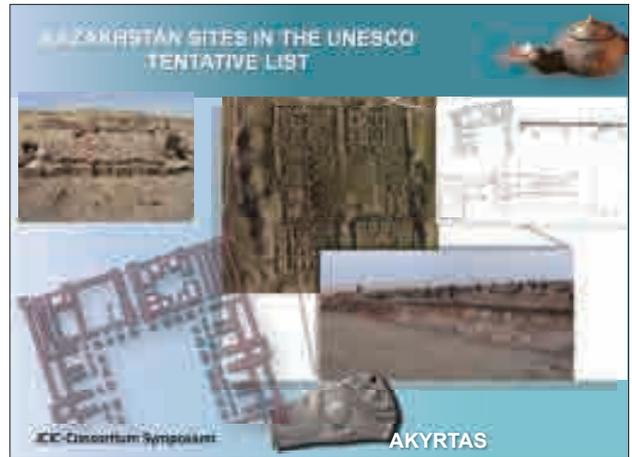


図7 アクルタス



図5 カヤリク



図8 オトラル

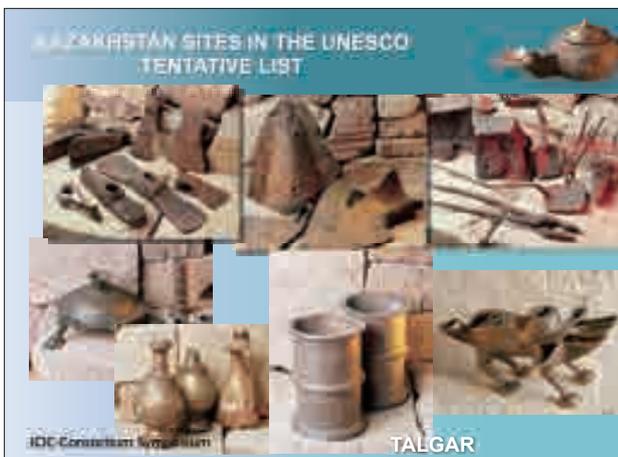


図6 タルガル

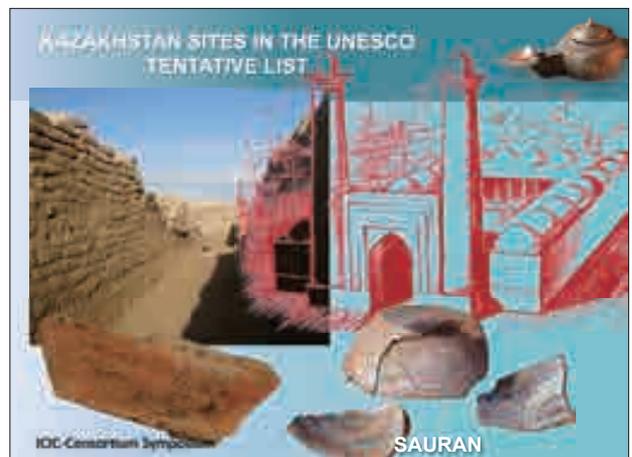


図9 サウラン

#### (4) オトラル (図8)

オトラルは我が国においてもっとも重要な遺跡の一つで、巨大なオアシスと多数の遺跡があります。オアシスの中心部は50×50 kmあり、そのなかに140の遺跡や中世都市が存在しています。オトラルの町はシルダリヤ川、ブグン川、アリス川の流域にあり、チンギス・ハーン軍に最初に征服された町として、歴史的・政治的によく知られる都市の一つです。

高さ10 m以上、基礎が4.5 mもある壁は、よく保存されています。保存状態が良い灌漑システムもあり、この地域が水力を利用していたことを示す重要な文化遺物として調査研究すべき対象となっています。

#### (5) サウラン (図9)

サウランは14世紀から18世紀の間の遺跡で、保存状態はきわめて良好です。この地区から多くのイスラーム教関連の遺物や遺構が検出されました。たとえば、16世紀の謎の一つに数えられる、揺れるミナレットのある有名なメドレセは、この遺跡で発掘されました。



図10 ジェトアサル・オアシス

#### (6) ジェトアサル・オアシス (図10)

ジェトアサル・オアシスは1946年から発掘調査され、その膨大な出土資料は現在、ロシア連邦に移送され、各博物館で保管されています。

#### (7) ジャンケントとフヴァラ (図11、12)

ジャンケントとフヴァラは、アラル海近くに位置する遺跡です。オグズ文化を知るよい手がかりとなっています。今日に至るまで、オグズ文化はよく知られていませんが、これまで5年間、9世紀～11世紀のオグズ民族の文化に関する発掘調査が続けられてきました。

#### (8) アラル・アサルとケルデリ (図13)

大霊廟ケルデリとアラル・アサルの集落は、アラル海の海底にあります。ウズベキスタンとカザフスタンにまたがるアラル海は、現在、壊滅的な状況にあり、干上がっています。このアラル海で考古学者らはいくつかの遺跡の発掘調査を行いました。広大な地域がただの砂地となっていますが、私たちは大霊廟と、貨幣を鋳造していた集落を確認しました。貨幣は米の交易に使われてい



図12 ジャンケントとフヴァラ



図11 ジャンケントとフヴァラ



図13 アラル・アサルとケルデリ

ました。

カザフスタンには他の国と同様、問題を抱えている文化遺産があります。国内の遺跡のほとんどが、日干しレンガや泥レンガによってつくられており、遺跡の重要性にかかわらず、その保護は困難をきわめています。この地域が過酷な気候下にあること、日干しレンガや泥レンガなど壊れやすい材料が用いられていたことに原因があります。また、考古学的調査の最終段階にあたる保存修復・保護だけでなく、複雑なドキュメンテーションの過程にも問題があります。文化遺産の事前調査から保護、維持管理など、各活動を行ううえでドキュメンテーションは重要な作業です。

シルクロードを世界遺産リストに記載するための戦略会議を私たちは何度か開催してきました。それらは、日本主導の、中央アジアにおけるシルクロード世界遺産推

薦ドキュメンテーション支援事業のなかで実施されたものです。その一環として実施された研修会やワークショップは、人材育成と技術移転の側面で有益でした(図14)。なかでも、トルクメニスタンで開催されたセミナーは、非常に大きな成果をあげました。考古学の発掘調査における高度な技術の研修を目的に実施されたこのワークショップでは、特にメルヴでの作業やムノン・テペのチームとの現場作業を通じて、スタッフ全員が実際に機器を使用する機会を得ることができました。ドキュメンテーションの方針について議論を重ねることができましたし、将来のニーズについて協議する機会も何度かありました。ユネスコ日本信託基金事業のもとで導入すべき有用な機器について十分に話し合えたことは、私たちにとって貴重な経験となりました。

これまで、カザフスタンでは物理探査に特化したワークショップが2度開催されています。物理探査の専門家の育成を目的としたもので、カザフスタンと他の中央ア



図14 シルクロード世界遺産推薦ドキュメンテーション支援事業



図16 サウラン遺跡の調査



図15 物理探査に関するワークショップ



図17 サウラン遺跡の調査

ジア諸国の専門家が対象となりました。また、カザフスタンではまだ導入されていない物理探査（地中レーダーGPR、電気抵抗率ER）の効果を試すことも兼ねていました（図15）。

地球物理学的手法を用いて高度な考古学的調査を実現するため、ワークショップを通して私たちは有用な知識を得ることができました。物理探査を使い始めてまだ3年ですが、すでに興味深い成果を得ています。たとえば、以前にワークショップを実施したサウラン遺跡の2つの区画では、構造物はすべて日干レンガでつくられていることを、実際に探査機器を用いて明らかにすることができました（図16～18）。

もう一つ、キルギスで実施されたワークショップがあります。その実地研修では、日本人チームが考古遺物の取り上げ、土層はぎ取り、土器の復元方法を指導してくれました（図19、20）。そこには、キルギスから8人の若手専門家と、中央アジア諸国の大学、博物館、研究機

関からも数人が参加しました。タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンでもプロジェクトが実施されていますが、これらはすべて日本政府や日本の専門家によって支援されています（図21）。

日本政府の支援のおかげで、私たちは高度な技術を用いて地形図を作成するだけでなく、多様な考古遺跡の3Dモデルを作成できるようになっています。カザフスタン国内での最初のプロジェクトとして、「オトラルの保護と保存」が4年にわたり実施されました。このプロジェクトは、国内におけるドキュメンテーションの新たな手法を構築する重要な基礎づくりとなりました。これはユネスコやアーヘン大学（ドイツ）と密接な関係にあった日本人チームの指導によって築かれたものともいえます。現在、私たちの専門家はすべての遺跡記録を3D技術を使って作成できるようになっています（図22～24）。ドキュメンテーションは考古学的観点から非



図18 サウラン遺跡の調査



図20 キルギスでのワークショップ



図19 キルギスでのワークショップ



図21 タジキスタンでのワークショップ

常に重要な活動ですが、同時に危険を伴うものでもあります。私たちは自分たちの手順を辿れるよう、すべての工程を記録するようにしています。

オトラル遺跡にあるオアシスでもドキュメンテーションプロジェクトを実施しています。そこでは、日本人

チームが中央アジア諸国に伝えたGIS技術を活用しています。たとえば、衛星画像の分析など、衛星画像はカザフスタン国内の複雑な構造物、遺跡や地盤の分析に役立っています(図25、26)。

近年、カザフスタン国内では、支援を通じて習得した



図22 考古遺跡のドキュメンテーション



図25 GIS技術を用いた分析



図23 考古遺跡の地形図作成



図26 GIS技術を用いた分析



図24 考古遺跡の3Dモデル作成



図27 遺物の調査研究

手法・技術が多くのプロジェクトで活用されています。ドキュメンテーションの手法だけでなく、考古遺跡におけるあらゆる遺物の調査研究、保存修復が可能になってきました(図27～30)。

最後に、今年(2014年)6月末、10日間にわたってカ



図28 遺物の保存修復

ザフスタンのシルクロードの構成遺産の一部として8か所の遺跡を世界遺産リストに加えることができました。

今回登録された8遺跡は、いわゆる天山回廊のうち、カザフスタン国内におけるシルクロード遺跡の一部にすぎません。カザフスタンには、まだ暫定リストに30を越える遺跡が記載されています。今回の世界遺産登録は最初の一步でしたが、きわめて重大な一步であったといえます。

私たちは登録を支援して下さった日本の皆さまに深く感謝しております。共同作業を通じて今回成功を収めることができました。今後もこのプロセスが絶え間なく続くことを願っています。



JIC-HERITAGE

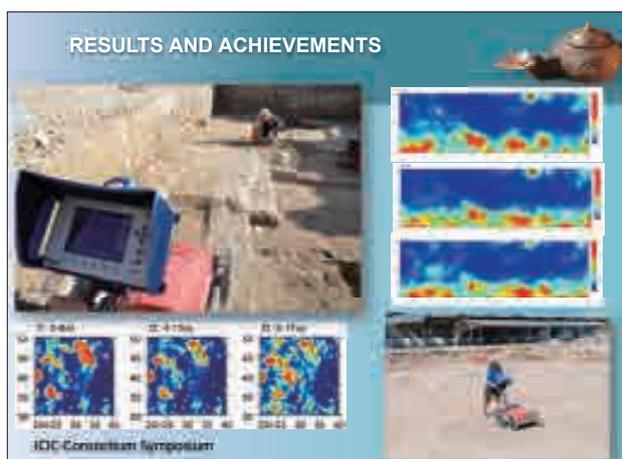


図29 遺跡の物理探査

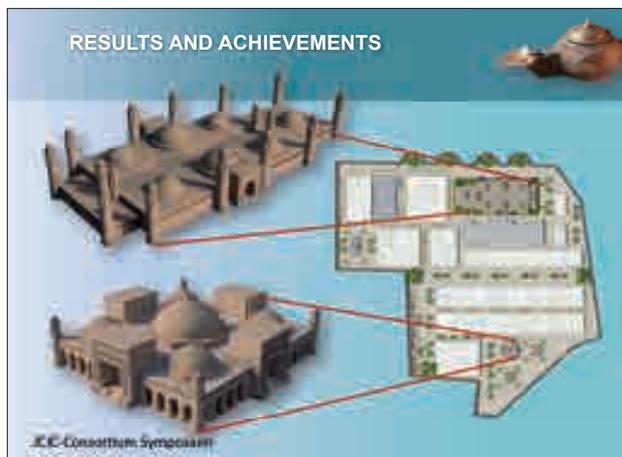


図30 3Dモデル作成

# パネルディスカッション 「シルクロードと日本」

## 司会

### 前田耕作

文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長／和光大学 名誉教授

1933年生まれ。名古屋大学にて美学・美術史を学び、1964～1977年にアフガニスタンの古代仏教美術の考古学的調査に携わる。1975～2003年和光大学教授を務める。2003年よりユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤン遺跡の保存事業に参加。現在、ユネスコ・アフガニスタン文化遺産保護国際調整委員会委員、平山郁夫シルクロード美術館評議員、日中文化交流協会常任理事、アフガニスタン文化研究所所長などを兼任。『アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤン』（晶文社、2002）、『玄奘三蔵、シルクロードを行く』（岩波書店、2010）など著書多数。

## パネリスト

### 藏中しのぶ

大東文化大学外国語学部 教授

1960年神戸生まれ。博士（文学）。奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻修了。日本文学・日中比較文学専攻。8世紀の日本における伝記文学の成立には、玄奘三蔵の伝記『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』、地誌『大唐西域記』の影響があると考え、伝記から派生した説話の生成、特に、敦煌にのこる玄奘説話に関心を寄せる。主要な著書に『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』（翰林書房、2003）、『延暦僧録注釈』（大東文化大学東洋研究所、2008）、論文に「玄奘三蔵の慟哭」（『水門』第21号、2013）がある。

### 西藤清秀

奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー

アリゾナ大学大学院修了後、1982年奈良県立橿原考古学研究所に勤務する。1990年、なら・シルクロード博覧会後の奈良県によるシルクロードの隊商都市シリア・パルミラでの地下墓の発掘調査に参加する。その調査から22年、パルミラの墓の発掘調査や修復復元に携わる。しかし、2011年以降、シリアの内戦悪化のために現地には赴くことができず、ヨーロッパの美術館に収蔵されているパルミラ葬送用彫像の3D計測を実施し、パルミラの彫像の工人・工房の同定を試みている。国内では奈良県文化財保存課主幹として文化財行政に携わった後、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館館長として博物館運営に従事する。2014年3月退職、現在に至る。

### 森本公誠

東大寺 長老

1934年生まれ。1949年東大寺に入寺。1957年京都大学文学部卒業。1961～62年カイロ大学留学。1968年京都大学文学博士学位取得。1975年から2004年にかけて東大寺図書館長、東大寺学園常任理事、東大寺財務執事、同教学執事、執事長・華嚴宗々務長、同上院院主・東大寺学園理事長等を歴任後、2004年5月～2007年4月東大寺第218世別当・華嚴宗管長。2010年5月～2013年4月東大寺総合文化センター総長。著書に『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』（岩波書店、1975）（日経・経済図書文化賞受賞）、『世界に開け華嚴の花』（春秋社、2006）（圓山記念文化賞受賞）、『イブン・ハルドゥーン』（講談社、2011）など多数。

### 吉田 豊

京都大学大学院文学研究科 教授

1954年石川県生まれ。京都大学文学部を卒業後、神戸市外国語大学などを経て2006年4月から京都大学文学研究科教授。2014年7月から英国学士院Corresponding Fellow。専門は言語学で、なかでもイラン語の歴史、特にソグド語文献の解読やそこから明らかになるソグド人の歴史を研究。代表的な著作には、『イラン語断片集成 大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』（京都、1997[1999]）や、中国で発見されたマニ教ソグド語の手紙を解読した『吐魯番新出摩尼教文献研究』（北京、2000）、『ソグド人の美術と言語』（京都、2011）がある（いずれも共著）。最近ではソグド人と宗教のかかわりから、日本にあるマニ教絵画を発見し話題になった。





生まれると口に蜜をつけて甘い言葉で人をだまし、お金を握ったら放さないよう、赤ちゃんの手に膠にかわを握らせる」といったことをいっていました。

ソグド人は、中国の人たちのお墓に副葬される明器めいきや俑ようと呼ばれる人形としてしばしば図像化されています。「深目高鼻」と称し、目が深くて鼻が高く、帽子をかぶり、カフタンというコートを着て、ベルトで締めてブーツを履いた格好をしています。人形以外にレリーフや壁画もあります。

もちろん、仏僧になったり、ほかのいろいろな活動をしていた人、大臣になったソグド人もいます。

図3のラクダに乗るソグド人の像は、代表的なものの一つで、帽子をかぶり、襟の開いたカフタンを着てブー



図3 唐代の明器。駱駝に乗るソグド商人（『丝路胡人外来风—唐代胡俑展』2008年、文物出版社）



図4 シビ王ジャータカ。敦煌莫高窟254窟（北魏）。白い帽子をかぶって天秤を持つ男がソグド人（『敦煌への道』1978年、NHK出版）

ツを履いているのがわかります。図4は、敦煌莫高窟254窟の壁画で、少しわかりにくいと思いますが、白い帽子をかぶって天秤を持つ男としてソグド人が描かれています。これは、鷹に追われた鳩がシビ王に助けを求めたとき、鷹はシビ王に、自分も肉を食べないと生きていけないので、その鳩の重さ分の生きた肉をよこせといい、シビ王は自分の足の肉を切ってやるという場面です。なぜか知りませんが、その話で肉の重さを量っているのはソグド商人です。ソグド人のことは仏典にはできませんが、絵画化したときにできています。

### ソグド語資料

ソグド語は、現在のイラン系のペルシア語とは兄弟関係の由緒正しいインド・ヨーロッパ語族の言語です。たとえば、「兄弟」はソグド語で“vrat”といい、ペルシア語の“beradar”、英語の“brother”と同じ語源です。また、使われているソグド文字は、もともとはアケメネス朝ペルシア時代に公用語として使われていたアラム語の22文字の子音文字に由来します。もとは横書きでしたが、5世紀後半ころ縦書きになりました。

私はソグド語を研究している人間として、中国で出土

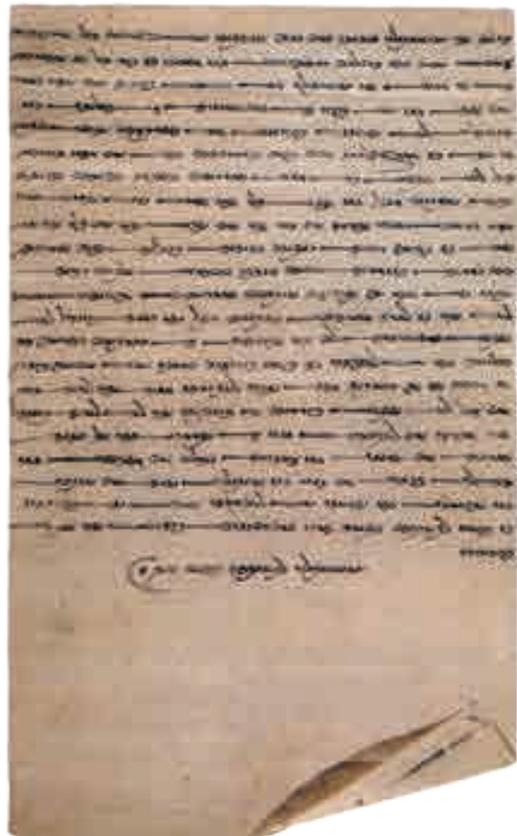


図5 ソグド語で書かれた女奴隷売買文書（639年）トルファン・アスターナ出土

したいくつかの文献を解読してきました。図5は、トルファンのアスターナ出土の639年の紀年を持つ、ソグド人がトルケスタン生まれの女奴隷を120ドラクマで中国人僧侶に売る契約文書です。このような商業活動に関する文書はあまり多くはありません。じつをいうと、私たちが読む資料の多くは世俗文書ではなく、宗教文書です。たとえば、図6は、私が解読した非常に有名な1010年ころに書かれたマニ教徒の手紙です。その図の右に宛名があり、そのあとに挨拶が続き、全体で3mほどあります。宛名のすぐ後にきれいな絵を描き、マニ教の僧侶、何々様へという言葉が書いてあります。

私が解読した史君墓誌は(図7)、2003年に西安で発掘されたソグド人墓から出土したものです。その碑文によると、被葬者はウィルクカク(Wirkak)という名前のソグド人で、579年に86歳で死亡したが、奥さんとは60年間添い遂げ、1か月違いで他界したと書かれています。妻が他界した日は、満60年めの結婚記念日で、3人の息子が両親のためにつくった墓です。その碑文はバイリンガルになっており、漢文とソグド語が書かれています。

### 日本にも伝わっていたソグド語

日本にもソグド語の資料が奈良時代に伝わっています。法隆寺旧蔵で、現在は東京国立博物館が所蔵する



図6 マニ教徒の手紙(1010年頃)。トルファン・ベゼクリク石窟出土



図7 史君(Wirkak)の墓誌(漢文・ソグド文)。西安出土580年埋葬(『從撒馬爾干到長安—粟特人在中國的文化遺迹』2004年、北京図書館出版社)

香木に謎の文字がナイフで削られています(図8)。一つは中世ペルシア語で、ボフトグ(Bokhtog)という人名と、もう一つはソグド語の焼き印が押してありました(図9)。これを最初に削ったのは奈良時代で、750年代には明らかに日本にはいつていたわけです。

正倉院、法隆寺、東大寺に伝わる伎楽「酔胡王」の面もあります。酔胡王は、酔っぱらった胡の王で、「胡」はシルクロード時代の中国では主にソグド人を指します。図10の面は、ソグド商人のリーダーのようです。ソグド人は、必ず特徴的な帽子をかぶっています。この中央の帽子に見えるのは、羽根飾りといひましようかシームルグと呼ばれるイランの想像上の動物だと思ひます。顔が犬で翼がついた怪鳥を飾りにしているもので、このような帽子はソグド人の薩宝(sartpaw、キャラバンリーダー)の象徴でした。中国ではソグド人の自治組織の長でもありました。

### おわりに

シルクロードの商業はソグド人が主役でした。ソグド語はシルクロードで一種の国際共通語の役割をはたし、ソグド文字はそのうちウイグル文字へ、そしてモンゴル文字、最終的には満州文字に受け継がれていきます。

唐の時代の都市部では、ソグド趣味といひますか、イラン趣味が非常にさかんで、その流行が奈良にも及んだと考えられます。実際、ソグド商人が来日していたかどうかはわかりませんが、確実に一人は来ています。鑑真についてきた安如宝です。

前田 質問です。ソグド文字は横書きといひわれましたが、横書きは右から書くのでしょうか、ギリシア・ラテン語



図8 法隆寺所蔵香木(『MUSEUM(東京国立博物館美術誌)第433号』1987年、東京国立博物館)

のように左から書くのでしょうか。

**吉田** 本来はアラビア文字のように右から左への横書きです。それを90度回転して縦書きにしたため、行は縦書きのときは左から右に進みます。**図7**を見ていただいたらわかりますが、真ん中から左側が漢文で、右側がソグド語です。最後は32行目まであったと思いますが、ちょうど真ん中から左に向って漢文、右に向ってソグド



図9 法隆寺所蔵香木の銘文と焼印（『MUSEUM（東京国立博物館美術誌）第433号』1987年、東京国立博物館）



図10 醉胡王の面（正倉院、法隆寺）（『正倉院宝物7巻 南倉1』1995年、毎日新聞社）

語の碑文が展開しています。

**前田** ありがとうございます。一つ新しい知識が増えました。吉田さんの話にでてきた安祿山、史思明は、安史の乱の中心人物です。安祿山の方はわかりましたが、史思明も漢人ではありませんよね。

**吉田** 安祿山と仲がよかった人で、<sup>とっけつ</sup>突厥系のソグド人だといわれています。突厥はトルコ族ですが、それと深い関係にあったソグド人だと考えられます。

**前田** 突厥系のソグド人2人が安史の乱を起こし唐王朝を震撼させます。東洋史ではそのとき歴史的に有名な書家であり将軍であった<sup>がんしんけい</sup>顔真卿が、この2人と戦ったことになっています。

それから、祿山の“Roxane”に関連して思い起こすのは、アレクサンドロスがバクトリアで娶った王女の名前がロクサーナです。女性ですからロクサーナかもしれませんが、非常によく似ています。これは関係ありませんか。

**吉田** どちらも同じイラン系で同じ語源の言葉です。いまのペルシア語の「ロウシャン」と同じで、「明るい」という意味の語を名前にしたものと考えられています。

**前田** 皆さんいろいろお聞きしたいことがあるかと思いますが、吉田さんにはのちほど、ソグド人と宗教との関係のところでもう一度お話をさせていただきます。

次は森本公誠東大寺長老をお願いします。

森本さんは第218世東大寺別当と伺っています。東大寺ですから華嚴学の学僧であるのは当然ですが、同時に近代イスラームの思想に大きな影響を与えた14世紀に北アフリカのチュニスに生まれた歴史家であり思想家でもあったイブン・ハルドゥーンの優れた研究者でもあります。イブン・ハルドゥーン『歴史序説』は岩波書店から大冊ででておりますが、イスラームとのつながりも大きく視野に入れてこられた学僧です。森本さん、お願いします。

## シルクロード仏教フェスティバル初日 —シルクロード往来有縁無縁者追善法要—

森本公誠

日本にシルクロードブームが起こり、1988年、奈良県と奈良市の共催で『なら・シルクロード博覧会』が催されました。26年前ですから、このなかにはまだ生まれていない方がおられるかも知れませんが、半年ほどの期間に大変な人数、600万人ほどが来られました。この博覧会は、東大寺のすぐそばの奈良公園を主な会場とし、

一部、東大寺の境内を使わせてほしいということでした。私たちとして知らん顔をするのもいけない。私たちの俗語で、「ひんねしを起こしている」というのですが、東大寺はシルクロードとまったく無関係ではありませんから。

この博覧会がキャッチフレーズの一つにしていた「正倉院はシルクロードの終着駅」という謳い文句をそのま



図11 フェスティバル準備風景



図12 フェスティバル準備風景



図13 稚児行列



図14 伎楽行列



図15 僧兵行列



図16 僧侶行列

ま正直に受け取るか、ちょっとおかしいのではないかと受け取るか、受け取り方でいろいろです。つまり、シルクロード、「絹の道」というベルトコンベヤーのような道によって、日本人が憧れる西方のさまざまな文物が奈良までやってきたという印象を与えるのではないかと。むしろ、シルクロードは、大変困難な、渡るのに非常に大変な道であり、そのような道を命をかけて行き来した

方々の存在があってこそシルクロードといえるのではないかと。そのような人々を顕彰し、その人々の霊を慰めることをやってこそシルクロードだということが、お寺のなかでだんだん衆議が固まり、『なら・シルクロード博覧会』にあわせて東大寺で『シルクロード仏教フェスティバル』を4月から10月まで開催することにしました。その初日の4月22日に、シルクロードを渡ってきた

方、日本から渡って行かれた方を具体的に調べ、そのお名前を、われわれの言葉でいう「過去帳」にして読み上げ、それらの方々の菩提を弔うため、「シルクロード往來有縁無縁者追善大法要」を行うことにしました。東京の方はあまりお寺の法要をご存じないと思いますので、写真で見てくださいと思います。

大仏殿は、木造では世界一といわれている大きな建物です。このイベントを行うための準備は大変でした。**図11左**は、宝珠を立てるためのもの、**右**は、往來した方々の霊を慰めるためにつくったお位牌です。**図12**のようにお飾りをします。



図17 中門出迎え



図18 庭儀式場へ



図19 別当表白

南都のお寺の正式な法要は、建物のなかではなく前庭で行います。これを庭儀といいます。これは、古代の政治の場である大極殿の前庭で、天皇が、たとえば正月ならば朝賀の儀で、群臣が参集することと形式的には通じるものがあります。法要にはたくさんの人が参加します。その一つに稚児行列があります。東大寺学園にある幼稚園の園児たちに、天平の衣装を着せて稚児行列を行いました(**図13**)。お母さん方も晴れの舞台です。その行列がずっと続きます。

東大寺大仏様の開眼供養は752年に行われました。そのとき、たんに儀式だけではなく、一般の皆さまに喜んでいただけるような、現在でいうイベントも開かれました。そのなかの一つとして中国から伝わったといわれている伎楽が奉納されました。伎楽は一種の無言劇ですが、その故事にちなみ、このたびも伎楽を演じることにし、そのメンバーも一緒にこの行列に参加しました(**図14**)。また、われわれを警護するための僧兵が先導し(**図15**)、そのあとにわれわれが続きます(**図16**)。そして、大仏殿内の中門にはいると、当時の管長が出迎えを受け(**図17**)、庭儀式場へと導かれます(**図18**)。

そして、法要は大仏殿前に舞楽台を設け、その舞台上で行いました。**図19**は、当時の管長が、本尊・盧舎那



図20 絲綢之路往來過去帳 卷子本



図21 絲綢之路往來過去帳奉読

大仏様にかくかくしかじかの趣旨で法要をいたしますよというメッセージを表白として述べている様子です。

どういった人たちがシルクロードを往来したかを、ただやみくもに人の名前を並べただけではわからないため、一応区分けをしました。インドなど西からまず中国へやって来た人たちを第1部とし、第2部は中国や朝鮮半島からインドあるいはもっと西へ行かれた方々、第3部は西のほうから日本に来た、たとえば、鑑真さんのような方です。そして第4部は、日本から朝鮮あるいは中国・西のほうへ行った方々です。この4部門に分け(図20)、それを文献で発掘するといえますか探しました。

もちろん時代のかぎりがありますので、もっとも古い時代は有名な張騫の派遣されたとき、それから遣唐使が廃止されるまでのあいだで分類しました。

ところが、調べていくと結構、人数が多い。これを法要で読んでいただけで日が暮れてしまいます。そこで、これはという人を合計258名選び、その方々だけ節付けをして読み上げることにしました。

その後、せっかくなので、このような方たちをすべて調べて一つの本にしようとしたところ、2,100名を超えました。図21は過去帳を奉読している様子です。各部門を1巻とし、4巻の巻き物にして、名前を書き連ねて



図22 伎楽奉納 獅子



図23 伎楽奉納 酔胡王



図25 慶讃行事：芸能山城組



図24 式衆退出



図26 出版物

読み上げました。

このような法要のあと、必ず慶讃行事としてイベント的なことを行います。その一つとして伎楽を演じていただきました。これは、暴れた獅子を引いてきて黙らせる場面です(図22)。いろいろな場面がありますが、そのなかに、吉田先生が紹介された酔胡王があります。この

伎楽に使う面が正倉院と東大寺にいくつか残っています。この酔胡王は、典型的に鼻が高い西洋系の顔をしているので目立ちます。なぜかこの王様は酔っぱらう場面に使われるので、図23のようなしぐさをしていただきました。終わると、退出します(図24)。その後、休憩を挟んで、そのときにふさわしい慶讃行事として芸能山城組



図27 絲網之路往來過去帳(奉読分)

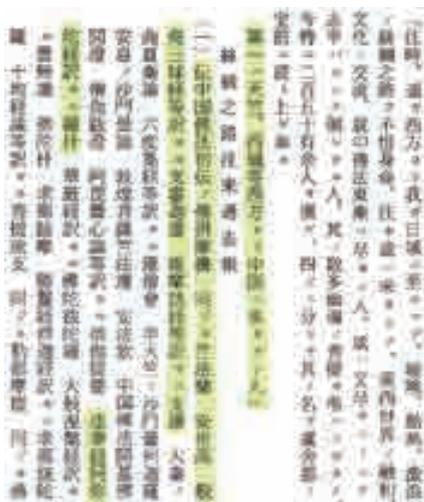


図28 絲網之路往來過去帳



図29 絲網之路往來過去帳

にインドネシアのケチャ等を演奏していただきました(図25)。

さて当日、僧侶が名前を読み上げるのを耳で聞いているだけではとても退屈しますので、258名分の人たちがどのような事績を行ったかを簡単ながら書き、それをパンフレットにして法要の参列者に配布しました。全員の方については最終的にまとめて1冊の本にしました(図26)。現在のようにパソコンは発達していませんでしたが、当時の最新式なやり方で1年以内に出版することができました。以上です。

**前田** 図27～31に『絲綢之路往来過去帳』の全文を紹介します。そこに「森本公誠編」と書いてあります。これは森本さんが編纂なさったということですか。

**森本** はい。4人の先生方と他の研究者およそ10人に協力してもらって編纂しました。それを過去帳にするにはそれなりのスタイルがあることから、私が作文しました。毎年行っている二月堂の修二会の法要で、過去帳奉読があります。これは、東大寺の創建ならびに復興に貢献された方々のお名前を読み上げるもので、一つの節付けしたスタイルがあります。それをここへ転用したわけです。

**前田** シルクロードフェスティバルの際に修二会で使っていた表白を活用したというお話でしたが、最初の渡しをちょっと読んでいただくわけにはいきませんか。

**森本** もう二十数年前の話です。もうまくいくかわかりませんが、ここに掲げている最初の部分は私が説明として話した部分で、その後、若い人たちが過去帳を奉読していきます。その第1巻目の出だし部分だけちょっと申し上げます。

「絲綢之路往来過去帳 伝中国佛法初伝ノ僧撰摩騰 同ジキ竺法蘭 安世高 般舟三昧経等訳セル支婁迦讖 維摩詰経等訳セル支謙 大秦ノ商賈秦論 六度集経等訳セル康僧會 中天竺ノ沙門曇柯迦羅安息ノ沙門曇諦 敦煌菩薩竺法護 安法欽 中国佛法開基佛図澄 僧伽跋澄 阿毘曇心論等訳セル僧伽提婆 法華経阿弥陀経訳セル羅什 華嚴経訳セル佛陀跋陀羅 大般涅槃経訳セル曇無讖 佛陀什 求那跋摩 勝鬘経楞伽経訳セル求那跋陀羅 十地経論等訳セル菩提流支……」

**前田** 当時の雰囲気伝えていただきました。この最初の部分でとても感動したのは、「有縁無縁者追善供養」とあったことです。日本へ来た人たちだけでなく、中国からお経をとりにかれた人、もちろん玄奘三蔵も法顕

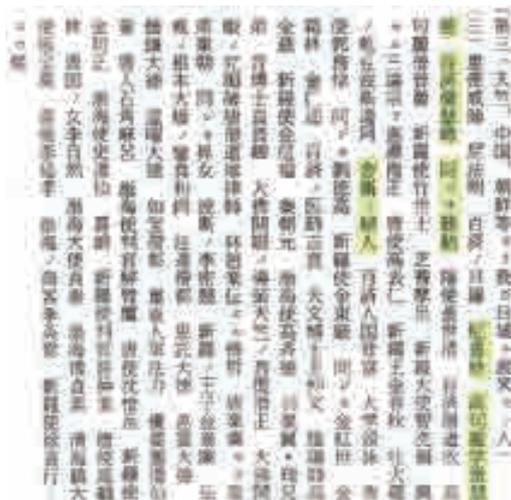


図30 絲綢之路往来過去帳



図31 絲綢之路往来過去帳

も含めて追善供養をするという、とてもおおらかなシルクロードの精神を、ある意味では過去帳が体現しているという感想を持ちました。無理をお願いして一節を語っていただきました。

次は、藏中さんです。藏中さんは、多くのアジアからの留学生をこのシンポジウムに連れてきていただいております。アジアの文化遺産に深い関心を学生たちが抱いているということで、次世代への橋渡しの役割をしっかりと担ってくださっています。

シルクロードの旅人といえば、日本人の多くが玄奘三蔵の旅の足跡を思い出します。かつて、朝日新聞などは文化事業の大きな柱に、玄奘三蔵の道を据えたこともありました。本日は玄奘さんの旅について、あまり知られていない敦煌に伝えられた貴重な資料を使ってお話を伺いたいと思います。

## シルクロードの玄奘三蔵説話

藏中しのぶ

### はじめに―「歴史的事実」と「文学的虚構」―

私は文学の立場から、シルクロードの敦煌で生まれた、ちょっとおかしな玄奘三蔵の説話についてお話をさせていただきます。

敦煌で発見された膨大な写本のなかに、非常に短い玄奘の説話があります。1枚の紙に収まる、短いものです。

図32はその敦煌写本です。タイトルは「唐三蔵・哭・西天・行記」です。「唐三蔵」とは、玄奘三蔵らしき唐の僧侶です。「哭」は「慟哭」、「大声をあげて泣く」「泣き叫ぶ」こと。「西天」はインドです。この説話は「インドへ行く旅の途上で、玄奘が泣き叫ぶ」というお話です。この敦煌出土の玄奘らしき「唐三蔵」の説話を、ここでは『西天行記』と呼びます。

『西天行記』のような玄奘が泣き叫ぶ話は、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』をはじめとする玄奘の伝記にはありません。「中国最大の訳経僧」と称された高僧中の高僧、玄奘三蔵が、なぜ、シルクロードの旅の途上で泣き叫ぶのでしょうか。

敦煌の文学は、仏教の教えをわかりやすく民衆に伝えるために、敦煌の変文作家が創作し、説経僧が民衆のまえで語った説経の台本だといわれています。日本でも、お寺のお坊さんは、仏教のありがたいお話をなさいますね。これが、民衆の文学、仏教説話であり、語りの文学です。

文学には、「ウソ」や「虚構」がつきものです。文学はことばの芸術ですから、読者や聴衆に「感動」を与えるために、さまざまな仕掛けをします。この「泣き叫ぶ玄奘」の話も、敦煌の説経僧が聴衆に「ウケ」るようにと、

おもしろく親しみやすく工夫を凝らし、玄奘に仮託して創作した嘘八百のお話なのです。

なぜ、こんないいかげんな玄奘の説話が、シルクロードの敦煌で生まれたのでしょうか。その理由を考えてみたいと思います。

### 玄奘三蔵の歴史的事実

#### ―『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』―

ここでまず、「歴史的事実」「史実としての玄奘三蔵」について確認しておきます。そして、伝記における玄奘の「歴史的事実」「史実」と、『西天行記』で創作された「文学的虚構」「仮構」としての「唐玄奘」を比較してみます。

玄奘三蔵は、孫悟空で知られる『西遊記』の三蔵法師のモデルです。『西遊記』は、日本でもテレビドラマ化されました。夏目雅子さんや牧瀬里穂さんが「三蔵法師」を演じられましたので、女性的なイメージがありますが、これが文学のウソ、「文学的虚構」です。実際の玄奘は、背が高い大男で、ガタイもよく、体育会系のイケメンであったようです(図33)。

玄奘三蔵は、唐の初期、太宗の貞観3(629)年、国禁を犯して長安を出発してインドに向かい、17年間にわたって西域・天竺諸国を巡礼し、貞観19(645)年に仏舎利・仏像・経典を携えて長安に帰りました。ちょうど、日本では大化の改新のころです。

玄奘が唐に帰り着いた頃には、すでに玄奘の名声は唐の人々のあいだで評判になり、いろいろな噂や伝説が生まれていたようです。その噂は、玄奘没後まもなく撰述された『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』をはじめとする玄奘



図32 敦煌写本『唐三蔵哭西天行記』・『敦煌秘笈』影片冊一、五五二頁(2009年、武田科学振興財団 杏雨書屋)



図33 玄奘三蔵(東京国立博物館)

の伝記にも見られますが、時代が下るにしたがって、どんどん尾ひれがつき、明代になって長編小説『西遊記』が生まれます。そこで、なよなよとした玄奘のイメージが定着し、現在、日本では女優が「三蔵法師」を演じるようになった、というわけです。

本日はご紹介する『西天行記』もまた、敦煌で生まれた、別系統の玄奘の噂話や伝説の一つです。主人公・玄奘の呼び名も、日本のテレビ『西遊記』では「三蔵法師」、そして、『西天行記』では「唐三蔵」となっています。

### 天竺への道—『唐三蔵哭西天行記』その1—

さきほどご覧いただいた写本を、荒牧典俊先生の御研究を参考に、私なりに解釈してみました。まずは、冒頭には、玄奘が長安を出発し、シルクロードを経て、イッスィク湖に到達するまでのルートの様子が描かれます。

「唐三蔵、西天に哭するの行記」

「去き去きて西天の路、<sup>ちやうちやう</sup>迢迢たる十万余」

インドへの遙かな道のりは十万余里。でも、ただ「西」に進むだけでは、インドには到達しません。途中、キジル・クム砂漠から、「南」に曲がって南下しないと、ヨーロッパに行ってしまう。しかし、中国人にとって、西は仏教の聖地インドであり、西方極楽浄土です。そこで、事実としての「南」を無視して、『西天行記』は「西へ行く」とだけ表現しています。これも「文学的虚構」です。

「海深く浜は浪鼓ち、山鬼毎に吾を驚かす」

「海」「浜」とありますが、シルクロードに「海」はありません。「海」でなく「湖」、広大なイッスィク湖です。「山鬼」は深い山にいる妖怪です。

「弱水の舟は汎ひ難く、高風起ちて掬くを異しむ」

「弱水」は中国の伝説的な川です。川の水の表面張力が弱く、舟を浮かべると沈んでしまうそうです。でも、そんな川が現実にあるわけがありません。

「氷河偏へに凜烈たり、雪嶺甚だ崎嶇たり」

「氷河」「雪嶺」は跋祿迦国の氷河、天山山脈の雪に覆われた嶺です。

これらの地名は、**図34**の地図、玄奘の伝記『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻一・二に記される「歴史的事実」としての玄奘三蔵のルートに確認できます。**図35**の地図は、『西天行記』の舞台イッスィク湖までのルートです。

「史実」の玄奘は、長安を出発して蘭州（甘肅省蘭州）を経て、黄河の西「河西回廊」を通り、左手に祁連山脈、右手にテングリ沙漠を望みつつ、涼州（甘肅省武威県）・



図34 『西天行記』と玄奘のルート（中野美代子『中国の英傑6 三蔵法師』1986年、集英社）



図35 玄奘三蔵、西域の旅（東京大学仏教青年会 [http://todaybussei.or.jp/izanai/asahi\\_buddhism/12.html](http://todaybussei.or.jp/izanai/asahi_buddhism/12.html)）

瓜州（酒泉、甘肅省安西県）を経て、沙州の敦煌には立ち寄ることなく、瓠蘆河の上流の玉門関をめざしました。玉門関は唐の西境、突厥との国境です。その西北に百里を隔てて五の烽があります。玄奘は第一烽から第四烽へと北上し、瓜州から莫賀延磧の沙漠を越え、西行して「西域北道」のオアシス小国家、伊吾・高昌国・阿耆尼国を経て屈支国に到ります。

しかし、このルート上に『西天行記』が生まれた敦煌はありません。玄奘は往路では敦煌を通りません。敦煌は、復路で通過するだけです。したがって、敦煌には「史実」としての玄奘の痕跡はありません。『西天行記』の作者、敦煌の変文作家は、後の時代に玄奘の伝記を読んで、この説話を創作したと考えられます。

『西天行記』は、玄奘の苦難の旅のクライマックスを次のように描写します。

「千人の同侶は尽き、万里に一身孤たり」

「1,000人いた同志は皆いなくなり、万里の道に私はただひとり、孤独である」。なぜ、「唐三蔵」は1,000人の仲間を失い、ひとりぼっちになったのでしょうか。

「史実」に近い玄奘の伝記によると、玄奘は屈支国で60日ほど、天山山脈の雪解けを待ち、その一支脈の「陵

山越え」に挑みます。ここで大惨事が起こります。雪山で遭難するのです。「陵山」は、葱嶺のベデル峠ではないかといわれています(図36)。その途上で、玄奘一行は突厥の盗賊2,000騎に遭い、跋祿迦<sup>バルカ</sup>国の氷河に苦しみ、7日かかりで「陵山」を越えます。このとき、玄奘伝に拠れば、30名の同行者のうち14～15名が凍死、牛馬の数はそれを凌ぎ、玄奘自身も身体をこわして病気になるという惨劇に見舞われます。

これに対して、『西天行記』では同侶の数は1,000人、2桁も増えています。しかも、その仲間が全滅したかのように書いてあります。これも、オーバーな「文学的虚構」です。実際には、30名の仲間のうち14～15名が亡くなったのです。

こうして数々の苦難を経て、ようやくイッスィク湖のほとりに到達し、眼前に広がる広大な湖を前にして、「唐三蔵」が詠じた詩が、この『唐三蔵哭西天行記』なのです。ここで「唐三蔵」は、慟哭するわけです(図37)。



図36 玄奘三蔵が天竺(インド)への旅で越えたとされるキルギス共和国と中国の国境に連なる氷河に覆われた天山山脈。平坦部がベデル峠。

(提供：文化ジャーナリスト 白鳥正夫氏)

## 『西天行記』における玄奘の慟哭

### 一仏伝、玄奘伝、敦煌説話一

『西天行記』では、玄奘とおぼしき「唐三蔵」が西に向かって、「聴け、我が哭を、嗚呼」、「聴いてくれ、我が慟哭の叫びを、ああ！」と泣き叫びます。

なぜ、「唐三蔵」はこんなに激しく泣き叫ぶのでしょうか。

「哭」の字には、「人の死を悲しんで泣く」という意味があります。『西天行記』では、その理由が「師の先に歿することを惆悵し、我が後に歿することを恚惶す」と説明されています。「師が先に亡くなられたことを知って悼み悲しむ。私が師に後れて生き永らえることを思うと、この身が震える」という意味です。おそらく、「唐三蔵」はイッスィク湖のほとりで、師が亡くなったという訃報を受けとったのです。

「流沙は弔客を絶ち、雪嶺は身軀を掩ふ」、そして、「たとえ、師のために弔問の客として私が唐土に引き返そうとも、沙漠は帰路を遮り、雪嶺は私の身体を雪でおおい帰路を妨げるであろう。もう、後戻りはできない」

では、この「師」とは、いったい誰だったのでしょうか。

玄奘の伝記『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』によると、玄奘が13歳で得度してから、イッスィク湖に到達するまでに、「師」として名前があげられる学僧は十数名もいます。ここでは特に、3名の人物に注目します。まだ若い玄奘が、将来大成することを予見しながらも、その大成した姿を見届けることができないと嘆く3人の人物です。ひとは、洛陽の大理卿・鄭善果、13歳の玄奘の才能を見抜いて得度を許可する人物です。また、長安の法常・僧辨というふたりの学僧は、まだ若い玄奘を「釈門千里駒」と称賛します。この3人は、海のものとも山のものともつかぬ、まだ若い玄奘が、将来、必ずや、ひとかどの人物になるであろうと予見しながらも、その大



図37 天山山脈の北、キルギス共和国の北方にある内陸湖のイッスィク湖。標高が高く、冬季は厳寒だが、夏の水温は20度もあり、格好の海水浴場。

(提供：文化ジャーナリスト 白鳥正夫氏)

成した姿を見届けることができないことを嘆くのです。

これは、仏伝、釈迦の伝記にある一つの類型、パターン化した説話を継承したものです。仏伝には、阿私陀<sup>あしだ</sup>仙<sup>せん</sup>の観相説話があります。釈迦が生まれたとき、阿私陀仙は生まれたばかりの釈迦をひとめ見て、「この子は将来悟りを開き、人々を救済するだろう」と予言します。「しかし、自分は、その頃にはすでに死んでいて、その教えを聴くことができない」と嘆くのです。

この釈迦の人相見の観相説話が、玄奘の伝記の3人にも、さりげなく挿り入れられました。この3人の「師」は、玄奘が将来大成することを、素直には喜びません。むしろ、その大成を見届けることができないことを嘆くのです。それは、「師」が玄奘よりも、はるかに年上で、玄奘より先に死ぬことが確実だからです。

敦煌の『西天行記』は、この仏伝、玄奘伝の「師が先に死んで、弟子の大成を見届けることができない」という枠組みから、「師が先に死ぬ」というところを、「師と弟子の生き別れ」「師の訃報を受け取る」という形に展開したものと考えられます。玄奘伝の「師が先に死ぬ」という枠組みが、ここで生かされたのです。

つまり、『西天行記』のあらすじは、玄奘が長安を旅立ったあと、唐で「師」が亡くなります。玄奘は旅の途上、イッスィク湖のほとりにあって、「師」の訃報を知ります。しかし、決死の陵山越えのあと、唐の国に引き返して甲間に訪れることもできない。玄奘が泣き叫ぶ直接の契機は、「先生が亡くなったという訃報を知った」ことにあると、私は考えています。

## 『唐三蔵哭西天行記』における

### 「唐三蔵」の人物像の形成

イッスィク湖のほとりで泣き叫ぶ「唐三蔵」は、実に人間らしいのですが、とても仏教の奥義を究めた高僧とは思えないキャラクターです。「本当に高僧なのか？」と疑ってしまうような弱さを吐露しています。

敦煌の「唐三蔵」の人物像を整理してみましよう。まず、敦煌の「唐三蔵」は「哭」と、激しく泣き叫びます。「両目の涙、先づ枯る」と、涙が枯れるほどに泣きます。そして、「聴け、我が哭を、嗚呼」。誰かにこの悲しみを聞いてほしいといひます。さらに、「唐三蔵」は「山鬼」、山の妖怪に脅かされて恐怖を感じます。また、「万里に一身孤たり」と孤独を嘆きます。さらに、「唯だ愁ふ、願くば未だ俘とならざることを」と、異民族に捕まって捕虜になることを憂い恐れています。そして、唐に引き返そうとする望郷の念を持ちます。しかも、「王舎城は



図38 シルクロードの一大オアシス・敦煌の莫高窟。玄奘三蔵が天竺(インド)から帰国の際、立ち寄った。(提供:文化ジャーナリスト 白鳥正夫氏)

いづくにか在らん、毘耶國、在りや無しや」と、インドには、ほんとうに王舎城や毘耶国があるのかと、前途に不安を抱えています。

仏教の僧侶として悟りを求めようという信念を持っているなら、このような迷いや孤独感は感じないでいただきたいものです。ところが、『西天行記』の「唐三蔵」は、そうではありません。なぜでしょうか。

それは、『西天行記』が、敦煌で生まれた説話だからです。「史実」としての玄奘三蔵を離れて、敦煌らしい「文学的虚構」に彩られた説話的な新しいキャラクターとして「唐三蔵」を生みだしているからです(図38)。

じつは、敦煌変文の写本のなかには、ほかに、「大切な人の死の知らせを受けて主人公が慟哭する」という類型的な説話があります。母親や一族を理不尽に殺された主人公が、その死を後で知って号泣する、親族の死の知らせを聞いて主人公が泣き叫ぶ、というパターンの説話群です。こうした説話は「敦煌講史文学」と呼ばれます。いずれも、敦煌の変文作家が歴史書『史記』『漢書』の話をもとに、独自に「文学的虚構」のアレンジを加えて創作し嘘八百のお話です。

敦煌の変文作家は、『史記』『漢書』と同様に、玄奘の伝記にも「死の知らせを受けて慟哭する」というパターンをあてはめ、嘘八百の敦煌独自の『西天行記』という新たな玄奘三蔵の説話、「唐三蔵」説話を生み出したと

みてよいでしょう。そこには、悟りすました偉大なる高僧ではなく、民衆に親しみやすい人間味あふれる「唐三蔵」というキャラクターがあり、大切な人を喪って主人公が泣き叫ぶという悲劇のクライマックスがあります。『西天行記』は、玄奘の伝記を踏まえつつも、敦煌変文の説話的な類型によって、民衆に語るために独自に創作された「敦煌講史文学」のひとつだったのです。

**前田** これまでのお話をお聞きになっておわかりだと思いますが、『西天行記』の経路でイッスィク湖に来るまでは、現在の世界遺産に登録されたところですが、この文書と今度の世界遺産の登録が、たまたま幸運にも重なっていることは大きな発見でした。

敦煌で玄奘の記録が説話に変えられていくプロセスを紹介していただきました。一つの語り物としてかたちができると、世界文学は何でもそうですが、それを一つの類型として伝えられていき、やがてそれは海を越えて日本にまで伝えられる経緯を後で少し追っていただきたいと思います。そして、行き着く先は『西天行記』そ

のものではありませんが、奈良の大安寺ですので、後で大安寺のお話をさせていただきます。

西のはて、ユーフラテスの西側、パルミラまで届かなければいけないので西藤さんにバトンを渡します。どうしてパルミラにかかわられたのでしょうか。パルミラが隊商ルートで重要な町であることは誰でも知っています。1932年に、ミカエル・ロストフツェフが、皆さん多分お読みになっていると思いますが、“The Caravan Cities”を書きました。これは名作で、『隊商都市』です。現在の文化庁長官の青柳正規さんが若いころに訳した傑作です。そこでロストフツェフは、「シリア砂漠という大海に浮かぶ小島のような町、これがパルミラだ。そして疑いもなく古代世界の最もロマンチックな遺跡だ」といっています。この言葉は有名です。ロストフツェフこそ、ユーフラテス川岸でドゥラ・エウロポスという有名な遺跡を発掘して世界をあっという間させた方です。その遺跡に、本日は西藤さんに案内していただき、パルミラからみたシルクロードというお話をいただきます。

## シルクロードの隊商都市パルミラを掘る

西藤清秀

私が所属する橿原考古学研究所は奈良県の組織で、奈良県内の遺跡を発掘していると思われるのではないのでしょうか。さきほど森本長老からお話がありましたように、「なら・シルクロード博覧会」が1988年に開催されたときのパビリオンに、パルミラの遺物もたくさん展示され、それらの展示品を返却するとき、当時の私たちの所長である樋口隆康先生がパルミラへいかれ、そのときパルミラ博物館館長から、お墓を発掘してみないかという話をいただきました。樋口先生も私も4世紀から7世紀の古墳を多く発掘しています。樋口先生自身、アフガニスタン、パキスタンの調査もなされ、しばらく海外での調査から離れていたこともあって、快諾して帰ってこられ、「西藤、パルミラへ行ってくれないか」という業務命令で1990年から調査にはいりました。業務で10年余りいき、その後、私が科学研究費補助金をいただいて現在に至っています。今年でちょうど25年目に当たります。

### パルミラとは

パルミラが滅びる273年頃、ゼノビアという美しい女王がパルミラを治めていました。彼女はトルコからエジ

プトまで領土を拡大したため、ときのローマ皇帝アウレリアヌスが彼女を攻め、それでパルミラが滅びます。日本ではちょうど卑弥呼の頃です。

ゼノビアはクレオパトラを非常に意識していました。さきほど王さんが交河故城や高昌故城を「シルクロードの真珠」といわれましたが、パルミラは「砂漠のバラ」といわれています。

「なら・シルクロード博覧会」のとき、ユーラシア大陸を横断する道だけでなく海の道もあるということで、奈良はユネスコともタイアップしてさまざまなイベントを開催しました。奈良の緯度が約34.5度、パルミラも同じです。もし私が東大寺の南大門をでてずっと西に歩いていったら、パルミラに着きます。これは奈良とパルミラにご縁があったのだと考えています。

パルミラはシリアの砂漠の真ん中にあり、ユーフラテス川から200 km、地中海から250 kmほどに位置します(図39)。ユーフラテス河が急峻なため、なかなか船も登れません。そのため、さきほど前田先生が触れられたドゥラ・エウロポスから隊商を組んでパルミラに来て、タルトゥースという港へ抜けてアンティオキア、そしてローマへ物資が運ばれていきます。このパルミラは



図39 パルミラの位置  
左：シリア全図、右：パルミラと奈良の位置



図40 パルミラ全景  
紀元前1世紀から紀元後3世紀に最も栄える。古くは紀元前1,900年にさかのぼる。パルミラはギリシア語、現地ではタドモル。a：パルミラ全景、b：パルミラ遺跡図、c：アルタバン墓出土中国絹織物、d：エラパール墓出土中国絹織物

1980年に世界遺産に登録されています。

図40aはパルミラの全景です。パルミラは紀元前1世紀から紀元後3世紀に、隊商の街としてもっとも栄えます。ただし、パルミラにあるベル神殿の下を発掘すると、紀元前1900年にさかのぼる遺物も出土します。パルミラはギリシア語名で、現地では「タドモル」と呼んでいますが、双方とも「ヤシの木」を意味しています。また、トルコのカッパドキア、さらにはイラク国境に近いシリアのマリ遺跡から紀元前1800年頃の楔形文書が出土し、その楔形文書にタドモルから人が来たといったことが書かれています。

ベル神殿を中心に列柱路が1.5km、その列柱路沿いに劇場、浴場、商店街、取引所、そして元老院などのさまざまな施設があります(図41)。これが生きる人の町アクロポリスです。その周りに死者の町ネクロポリスがあります。このネクロポリスには、東南墓地、北墓地、墓の谷、そして西南墓地の4か所があります。私たちは

東南墓地と、最近では北墓地で調査しています。

中国から伝わった絹は、ドイツ付近まで出土していますが、中国以外で出土する絹のなかでパルミラから出土する絹が一番品質がよいといわれています。図40cはアルタバン墓、dはエラパール墓の遺体を包んでいた絹です。

図41は、全宇宙の神を祀った一番大きなベル神殿です。パールシャミンはゼウス系の西の神様、こちらは東の神様です。神様はいまのところ六十数柱わかっていますので、さまざまな隊商の人たちが来ても、どこかで自分の故郷の神様に会えることができます。

#### 私たちの調査

4か所の墓地には、塔墓、地下墓、家屋墓と呼ぶ形態の墓があります(図42)。紀元前1世紀から紀元後1世紀、2世紀、そして3世紀と形態をかえながら営まれています。私たちが調査する地下墓は、開けた階段を下り、

門を入り地下の墓室に達するかたちになります。私たちは、東南墓地の墓に注目して1990年から発掘調査をしています。古代パルミラの社会を、墓の調査を通して理解し、さらには、シルクロードで運ばれる文物の在り方を理解することが目的です。そのため、考古学的調査以外に、建築学、美術史、人類学、そして化学的な調査でどんなものを食べていたか、どのようなものを飲んでいたか、さらに地理学的な調査と、現在のいわゆる画像化

したデータによる比較調査、環境復元調査も行っています。

図43は、1990年から2005年に東南墓地において調査をした墓で、ここではC号墓、F号墓、H号墓を紹介します。

C号墓は(図44)、109年にヤルハイが建造した墓です。この墓で珍しかったのは墓室の奥壁にはめこまれていた彫像です。ニケという勝利の女神が遺体を天空に運



図41 パルミラの主要遺構  
a: ベル神殿、b: 記念門、c: パールシャミン神殿、d: 劇場、e: 商店街、f: 浴場

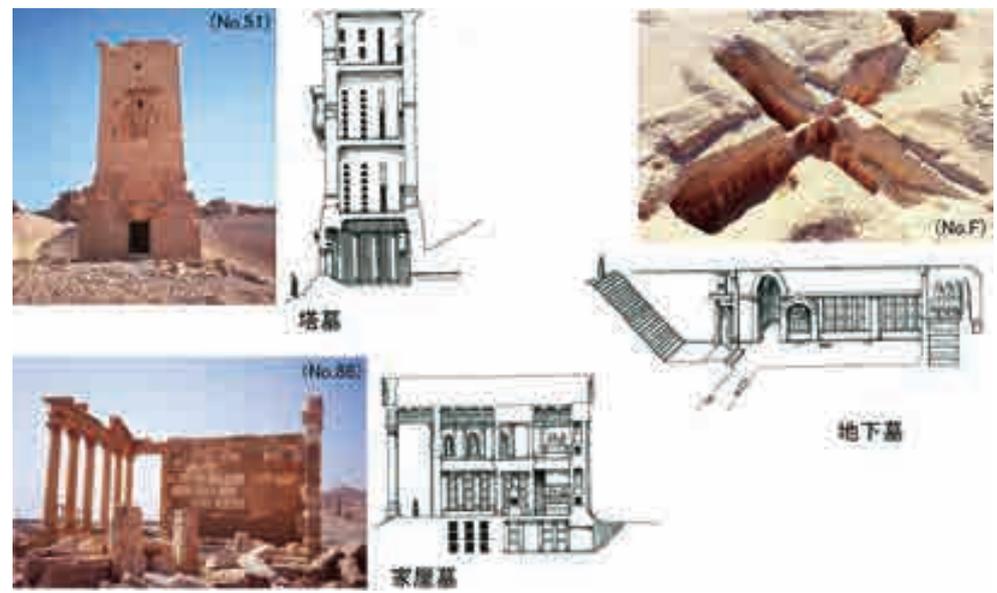


図42 パルミラの墓の3形態

んでいるシーンで、これまでパルミラで発見されたこの種の彫像では一番古いものでした。このニケは、シルクロードを通じて法隆寺などで見られる飛天にかわっていく可能性も考えられています。

私たちが日本で古墳を発掘すると、また中国や朝鮮半島で古墳が発掘されると多くの副葬品が出土しますが、パルミラではほとんど副葬品は出土しません。パルミラでは墳墓自体に「永遠の家」という碑文が書かれ、まさに死者のための家となっています。図44の彫像は、私たちがいう写真の遺影に当たるものです。門の鍵を開け

て部屋にはいると、亡くなった家族、親戚に出会えて話ができる、死者も家族と対面できるため死後の世界の面倒を見なくてもよいというようなシステムがパルミラにあったと考えています。そのためパルミラでは死者への副葬品がなかったと考えています。

図45は、F号墓(ボルパ・ボルハの墓)で、碑文から128年に建造されたことがわかります。この墓は、ボルパ・ボルハという兄弟が建造し、彼等の子孫は行政長官にもなった有力家族で、パルミラでも屈指の華麗な地下墓です。そして、この墓は商売人の町に造られたお墓で



図43 東南墓地における奈良隊の調査した墓(1990～2005)

a: E号墓、b: A号墓、c: C号墓、d: H号墓、e: F号墓



図44 C号墓の調査(1990～1992) 109年ヤルハイが建造、墓室奥壁にはめ込まれた彫像

a: C号墓全景、b: 建造者ヤルハイの息子シャルマ、c: 建造者ヤルハイ、d: C号墓奥壁、e: ニケ(勝利の女神)が浮き彫りされた半円形葬送用彫像、f: 3兄弟の墓奥壁、g: 石棺のニケ

もあり、220年と224年に、使っていない場所を他人に譲渡しています。この墓の内部には、彫像がはめ込まれた石棺があります。この彫像は解放奴隷とって、ボルパ・ボルハの奴隷ですが、彼等が家族の一員になって同じ墓に葬られています。

図46は正面の饗宴像で、家族団欒の一番楽しいシーンを描いたものです。残念ながら盗掘で頭は持っていかれようとしてきました。この大きな頭は神官の格好をしているため、盗掘途中にそのことに気づきその頭を放っていたようです。それを修復したところ見違えるような石棺になりました。

建造碑文には、128年にボルパ・ボルハがこの墓を建造したと書かれています。ここに非常に怖い顔のサチュロスというバッカスの従者が彫られています(図



図45 F号墓(ボルパ・ボルハの墓)の調査と修復(1993～2000)

a: F号墓全景、b: 門。128年ボルパ・ボルハという兄弟によって建造された。墓は「永遠の家」としての家の門構えをしている。この墓は220年・224年に譲渡されている。この墓はパルミラでも有力家族の墓である。

47)。これは、この墓の門正面上に飾ってあったのだと思います。同種の彫像がほかの墳墓にもあります。削れています。口と大きな耳、鼻、目、角があることが判ります。これは私のパルミラ人の友人が「西藤、塔墓の正面の壁に壺のレリーフがあるので見に行かないか」といわれて見に行ったら、サチュロスだったという非常にラッキーな話です。これは、私たちの鬼瓦、沖縄でいうシーサー的な役割を持ってこの墓を守っていたと考えています。

H号墓は、113年にタイボールによって建造された墓です。この墓には石棺が納められ、彫像がはめ込まれています(図48)。南側室壁面の彫像は(図49)、冬に雨が降った際、天井の土が剥がれ落ち硬い粘土が当たって彫像が全部はずれてしまいました。棺と彫像の後ろの漆喰の痕跡で各彫像の元の位置が判明し、すべて戻し、修復しました(図50)。

F号墓の修復には奈良県が資金を出し、またH号墓の修復には住友財団から経費をいただき修復しました。この両地下墓は、フィールドミュージアムとして観光客に見ただけのようにしました。2基の地下墓のうちH号墓は、いまの内戦で盗掘を受けたという話を聞いてい



図46 F号墓奥棺棚内家族饗宴像石棺

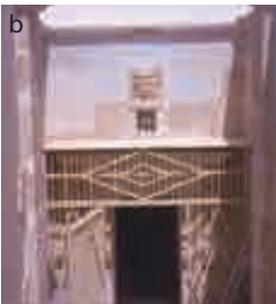


図47 F号墓の建造碑文とNo.67のレリーフ

サチュロス(バッカスの従者)の頭部、東アジアの鬼瓦と同じ意味。邪の浸入を防ぐ:辟邪。a: サチュロス浮き彫り付き建造碑文、b: 建造碑文を取り付けた修復されたF号墓入口、c: 墓の谷67号墓レリーフ、d: 墓の谷67号墓付近の塔墓

ます。

修復したものはどんな形で部材を入れたか、どういう形で修復できたか3次元で計測しています(図51)。F号墓とH号墓は図52のようになっています。この3次元の画像は、高齢者の方々、身体が不自由な方々に、現

地へ行けなくても臨場感を味わっていただけたり、尺度などを研究するにはよいと思っています。

現在、内戦で調査を中断していますが、パルミラの街遺構に隣接する129号墓を発掘調査しています。図53のように崩れていたため、3次元撮影をし、石材を



図48 H号墓(TYBLの墓)の調査と修復

タイボールによって113年に建造。後年幾度か譲渡される。a: H号墓墓室、b: H号墓門、c: H号墓全景、d: H号墓墓室壁龕



図49 H号墓南側室

南側室と出土胸像。a: 南側室全景、b: 胸像出土状況

取り上げ、掘り下げたところ、内部が図54になっていました。それをもとに復元すると図55のようになります。これは、3次元画像とコンピュータグラフィックスを組み合わせたものです。この内戦が終われば調査を続け、図56に掲げた項目について研究していきたいと考えています。

えています。

**前田** 今、シリアは戦火の真ただ中にありますが、シリアの文化遺産の状況も簡単にご紹介いただけますか。

**西藤** 図57上は、シリアの北アレッポのウマイヤド・



図50 パルミラ東南墓地地下墓の発掘後と修復後  
a：F号墓、b：H号墓



図51 修復後のF・H号墓の3次元計測とその作業風景  
a：H号墓階段部計測風景、b：F号墓内部計測風景、c：H号墓内部計測風景、d：F号墓内部計測時の計測状況のチェック風景

モスクの2010年ころの映像です。ここのミナレットも潰され図57下のような状況になりました。すべてのものが破壊され、むちゃくちゃな状況です。図58は、ISがラッカでアッシリアの彫像を砕いている状況です。まさにパーミヤーンのような状況になっています。

パルミラの都市遺跡は現時点ではさほど傷ついていませんが、流れ弾で柱頭などが欠損している部分もあります(図59)。一番悲惨なのは、アパメアというヘレニズム期にできた都市遺跡です。列柱路も1km前後残っていますが、その列柱路両側に穴がたくさん見えます(図

60)。それらは盗掘跡です。以前はきれいな畑地でしたが、現在は重機で盗掘しており、すさまじい状況になっています。

前田 最後のアパメアの盗掘の状況をご覧になっていただきましたが、現実的にコントロールできなくなっていて大変な盗掘が続いています。周辺の骨董屋さんの骨董の値段が下がるという現象が生まれているほどです。ちなみに、アパメアは、セレウコス一世・ニカトール、すなわち、セレウコス王朝始祖の妃の名です。その妃は中央アジア・バクトリアの出身です。



図52 F・H号墓の3次元画像

左：F号墓、右：H号墓。3次元画像の利点。1. 地下墓（構造物）を理解しやすい—構造物を臨場感ある形で第三者に伝えられ、社会教育的効果を生み出せる。2. 地下墓構築プランの比較研究がしやすい—どの視点・角度からも望める。3. 尺度の研究に役立つ。



図53 北墓地129-b号墓の調査

a：堆積石材の中の柱頭、b：堆積石材の中の窓枠、c：石材の取り上げ、d：取り上げ、配置した石材

話をもう一度、中央アジアへ戻します。ソグドと仏教徒について、吉田さんに少しお話させていただきます。最初の話に鑑真和上についてきたお弟子さん、安如宝の名がでてきました。安如宝は当然のことながら仏教徒になります。ソグドと仏教、この関係に何か手掛かりがありましたら紹介していただきたいと思います。

ソグドには、基本的にゾロアスター教とマニ教がありましたね。本日は仏教に少し突っ込んだ話がありませんでしたので、ソグドと仏教の話を少ししていただければと思います。文献を通してそういうことを裏付けるものはありますでしょうか。

**吉田** ソグド語に翻訳された仏典は比較的多くありますが、本土では仏教徒ではなかったようです。中国あるいは東トルキスタンなど仏教圏に来て仏教徒になり、比較的多くの仏典をソグド語に翻訳しました。世界中の民族

のなかで唯一、ソグド人は国家の支援なしに仏典を翻訳していたと思われます。彼らは中国に来て、おそらく横のネットワークだけで仏典を翻訳していました。

シルクロードとソグド人と仏教という話になると、ソグドに仏教があり、ソグドから中国に仏教が伝わったという印象を与えます。しかしそのような事実はありません。ソグドの姓を持つ訳経僧はたくさんいます。たとえば、康僧会は、お父さんの代にハノイまで来て、本人は孤児になり、仏教徒になりました。その後南京に来て翻訳をしたという経緯を持ちますから、本土では仏教徒ではなかったと理解しています。

**前田** そうすると、名称だけ仏教徒であり、ソグドの土地で仏教を受容し、それを中国へ持っていったという考え方は妥当ではないと。

**吉田** そうです。おそらくクシャーン朝のとき、仏教は



図54 129-b号墓の基壇内基壇南側の入口

a: 129-b号墓全景、b: 出土彫像片、c: 129-b号墓西側から見た全景、d: 内部から見た南入口、e: 129-b号墓室床面(南入口方向から)



図55 129-b号墓の復元図と3次元計測した部材をCGに合成した画像

1990年パルミラ遺跡東南墓地において発掘調査を開始し、2005年までに4基の地下墓と1基の家屋墓の調査を手掛け、2基の地下墓(F・H号墓)の修復・復元をおこない、2006年からは北墓地129-b号家屋墓の調査実施している。今後、シリアが平和になれば、129-b号墓の調査の再開と以下のパルミラの墓にかかわる総合的な研究を実施していく。

1. 詳細な考古学的な観察からパルミラの葬制にかかわる行為の復元
2. パルミラの研究史上、初となる総合的な形質人類学的観察
3. 地下墓・家屋墓の建造時の建築学的なオーダの解釈
4. 古代パルミラ社会の復元にかかわる古環境の分析
5. 墓の3次元計測による最新画像作成
6. 彫像の工人・工房の継続的調査とギリシア・ローマ彫像との比較

図56 おわりに

クシャーン領内にはいったと思われませんが、クシャーン朝はソグドを直接支配していません。玄奘がサマルカンドに行ったとき寺院が二つしかなく、それもたいした寺でないといっています。実際に発掘しても仏教遺跡は検出されません。山内さんが発掘しているイッスィク・クルのアク・ベシムでは検出されますが、そこの寺は中国の大雲寺といわれる、中国各地に建立した国分寺の一つです。そのため中国語の碑文が出土します。少なくとも始まりは唐時代の中国仏教でしたが、そこを玄奘が通ったときは寺はなかったと思います。

**前田** 森本さん、何か関連してございますでしょうか。

### 北アフガニスタン発見バクトリア語仏教祈祷文書

**森本** 私は初期イスラームの歴史を勉強しています。イスラーム教徒が中央アジアへ進出した時代に、アラビア

語で書いた文書が近年北アフガニスタンでたくさん発見されました。同時に、時代が一部重なるようにしてギリシア文字を使った中期イラン語といわれているバクトリア語の文書も百数十点、発見されました。そのなかに、数は多くありませんが、仏教文書があると聞き、吉田先生の紹介を得て、バクトリア語の専門家であるロンドン大学の先生へ会いに行ったことがあります。そのとき、その先生の紹介で、デイビッド・ハリーリーが集めているコレクションを拝見させていただきました。**図61**はその一部です。これはパーチメントでまだ整理はされていませんでしたが、バクトリア語の文書でした。アラビア語の文書も見せていただきましたが、大きなものを広げていくと**(図62)**長文です。**図63**は北アフガニスタン発見のバクトリア語仏教祈祷文書です。絵が描いてあるので非常にわかりやすい文書で、上に円光を抱えてい



図57 北アレッポのウマイヤド・モスク



図58 破壊されるアッシリアの彫像



図59 パルミラの都市遺跡



図60 アバメアの盗掘の状況

るのは仏陀像(図64)です。下には行者風の人が横向きに描かれています(図65)。行者としての特徴は水瓶を持っていることですが、この人も水瓶を持っています。明らかにイラン系の人で、立派なひげを生やしています。そして、仕切りとして葡萄唐草が描かれています。

この文書はたまたまネクタイの形状をしています。長さが縦33cmほどあります。もともとは丸めていたのではないかと、お守りのようにしていたのではないかと思います。

この祈祷文書に書かれている内容については、バクトリア語専門の先生が解説したものを使わせていただき、全体は非常に長いものですから一部だけ紹介いたします(図66)。原文はギリシア文字で書かれていますから、一番初めの行はギリシア文字、次行はローマナイズしたもので、三行目は漢訳です。「南謨」と書かれています。日本で一番有名なのは、南無阿弥陀仏の「南無」。しかし、「南」と「無」という字は新しい表現で、もっと古くは「南謨」を使います。これは「金光明最勝王経」などに

も使われていますが、それでここに当てはめてみました。

最初に「一切諸仏」とあって、いろいろな仏陀の名前がでてきます。これは、過去七仏にほぼ相当するものです。仏陀の最後は「南謨釈迦牟尼仏」です。要するに過去七仏の一番最後。それから、菩薩の名前がずっと続きます。その後、現地の信仰に近いものだと思いますが、四方を守る神々、夜叉などの名前がでてきます。そして最後に、祈願の文章がでてきます。これが欠けていてちょっと読みづらいのですが、いずれにしても、仏陀ならびに菩薩の名前をずっと唱えて祈願していたようです。これは、我田引水かもしれませんが、東大寺の修二会で唱えている称名悔過と形式は同じです。これが北アフガニスタンで発見され、時代は約5世紀といわれています。この時代は仏教徒もいたのではないかと。玄奘は、ギリシア文字のことを『大唐西域記』に書いていますし、そのなかにパーミヤン地方もこのような言葉を使っていると書いておられます。その意味では非常に貴重な資料ではないかと思います。



図61 ハリーリ・コレクション(一部)実見



図62 バクトリア語文書を広げる



図63 バクトリア語仏教祈祷文書(全図・布製縦33センチ)



図64 バクトリア語文書(部分) 頭光を頂く仏陀



図65 バクトリア語文書(部分) 水瓶をもつ行者

**前田** 時間も差し迫ってきて、突っ込んだ面白いお話がこれから展開するところで閉じなければなりません。シルクロードといってもさまざまな文化が多岐にわたって、それぞれ発展しており、それぞれの文化の醸成の仕方をしていることがおわかりになったと思います。わが国では、古代よりシルクロードから多くの多様な養分というのでしょうか、刺激を受け、日本の文化は育ってきました。そのことが現代に至るまで、わが国のシルクロード学の蓄積と成果にも反映しているといえます。本日、先生方に発表していただいたのは、これまでのわが国におけるシルクロード学の蓄積の一端です。先学として、白鳥庫吉、桑原隲蔵<sup>じつぞう</sup>、羽田亨<sup>みぎきょう</sup>、伊藤義教、石田幹之助といった人たちが、シルクロードについての名作をたくさん残されています。本日パネラーとしてご登壇願った先生方の短い語りを通して、その蓄積がいかに生きているかということを感じさせていただきました。多くの文化遺産をいただいたシルクロードとその学への恩返しとして、私たちはこれからも知的貢献を続けていく必要があると思います。

また、シルクロードをめぐる豊かな知的遺産の多様性こそ、いまだ戦乱が収まらない閉塞した時代の壁を突き抜けるための大きな発条になるものと確認します。藏中さんには大安寺とのお話を宿題として残してしまいました。いずれまた、大安寺、聖徳太子の熊凝精舎から始まって大安寺が生まれ、大安寺にさまざまな大陸で育った説話文学が受け継がれていくプロセスを語っていただく機会もありましょう。最近藏中さんが発表されている『水門一言葉と歴史』<sup>みなと</sup>第25号・第26号(勉誠出版、

- 5) ναμω δηβο-αγγακαρο βοδδο  
namo Dramkara buddha  
南謨燃燈仏
- 6) ναμω ρατνο-ραζο | βοδδο  
namo Ratnarśi(?) buddha  
南謨宝集仏
- 7) ναμω(sic) σακομανο βοδδο \*  
namo Śkyamuni buddha  
南謨釈迦牟尼仏
- 8) λωγο-αφαρο(sic) | βωδοσατφο ναμω  
(Ava)lok(it)asvara bodhisattva: namo  
觀世音菩薩、南謨
- 9) μητραγο βωδοσατφο | ναμω  
Maitreya bodhisattva: namo  
弥勒菩薩、南謨
- 10) βηραδο βωδοσατφο ναμω  
Bhaisajyarja(?) bodhisattva: namo  
藥王菩薩、南謨

図66 バクトリア語祈禱文書(部分)

2013年・2015年)という学術誌をご覧になっていただければ、その一端をのぞき見ることができるのではないかと思います。

今日は長い時間お付き合いくださりありがとうございました。これをもって文化遺産シルクロードの世界遺産登録を記念するシンポジウムとパネルディスカッションを閉じたいと思います。あらためて、今日奮闘していただいた四人の登壇者の方々に温かい拍手をお願いしたいと思います(拍手)。ありがとうございました。



JCIH-heritage

# 世界遺産としてのシルクロード

## 世界遺産に登録されたシルクロードの範囲

シルクロードは、2014年6月にドーハで開催された第38回世界遺産委員会で、日本の富岡製糸場と共に世界遺産一覧表に記載されました。今回登録されたのはシルクロードのうち、中国の漢～隋唐時代の首都である長安・洛陽から中央アジアのジェティ・ス地区までの「長安―天山回廊の交易路網」で、中華人民共和国22件、カザフスタン共和国8件、キルギス共和国3件の計3か国33件の資産から構成されています。

「長安―天山回廊の交易路網」は、ジェティ・ス地区、天山南路・北路地区、河西回廊地区、関中・中原地区の4地区に分けられ、5,000kmの距離を結ぶ道路網の総計は8,700kmに達します。各王朝及びモンゴル帝国の首都宮殿、交易地、仏教石窟、古代の道、道の駅、道路、万里の長城、要塞、古墳及び宗教施設等の様々な文化遺産があります。

図1 ジェティ・ス地区



図2 天山南路・天山北路地区



## 世界遺産に登録された33件の文化遺産

- |                    |             |             |
|--------------------|-------------|-------------|
| 1 長安城未央宮 (前漢)      | 12 タルガル     | 23 クズルガハ烽火台 |
| 2 洛陽城 (後漢～北魏)      | 13 アクトベ     | 24 カラメルゲン   |
| 3 長安城大明宮 (唐)       | 14 クラン      | 25 キジル石窟    |
| 4 洛陽城定鼎門 (隋唐)      | 15 オルネク     | 26 スバシ仏教寺址  |
| 5 高昌故城             | 16 アクルタス    | 27 炳靈寺石窟    |
| 6 交河故城             | 17 コストベ     | 28 麦積山石窟    |
| 7 北庭故城             | 18 函谷関 (漢代) | 29 彬県大仏寺石窟  |
| 8 ブラナの塔 (バラサグン)    | 19 崑崙古道石塚区  | 30 大雁塔      |
| 9 アクベシム (碎葉城、スイアブ) | 20 鎖陽城      | 31 小雁塔      |
| 10 クラスナヤ・レーチカ (新城) | 21 敦煌懸泉置    | 32 興教寺舍利塔   |
| 11 カヤリク            | 22 玉門関      | 33 張鷟墓      |



図3 河西回廊地区



文化遺産の種類

今回、世界遺産に登録された33件の文化遺産は、以下の5種類から構成されます。

- 1-11：中心都市
- 12-17：交易集落
- 18-24：通行・防衛施設
- 25-32：宗教遺跡
- 33：関連遺跡

図4 関中・中原地区



- 中国の文化遺産
- キルギスの文化遺産
- カザフスタンの文化遺産

# 国際シンポジウム

## 世界遺産としてのシルクロード —日本による文化遺産国際協力の軌跡—

主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁

日時：2014年9月27日(土) 13:30～17:00

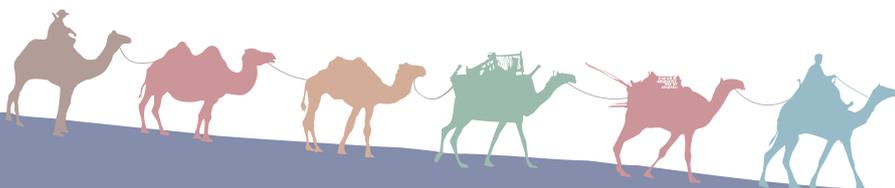
会場：イイノホール

後援：外務省、(独)国立文化財機構東京文化財研究所、(独)国立文化財機構奈良文化財研究所、(独)国際協力機構、(独)国際交流基金、(公財)住友財団、(公財)三菱財団、(公財)トヨタ財団、(公財)文化財保護・芸術研究助成財団、(公財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、(公社)日本ユネスコ協会連盟、国立民族学博物館、日本イコモス国内委員会、**NHK**、朝日新聞社、産経新聞社、東京新聞、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

来場者数：300名

## プログラム

- 13:30～13:40 **開会挨拶**  
石澤良昭(文化遺産国際協力コンソーシアム 会長、上智大学 特別招聘教授)  
山下和茂(文化庁 文化財部 部長)
- 13:40～13:45 **文化遺産国際協力コンソーシアムの紹介**  
岡田保良(文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長、国士舘大学イラク古代文化研究所 所長)
- 13:45～14:10 **基調講演「シルクロード世界遺産登録への日本の貢献」**  
山内和也(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 地域環境研究室長)
- 14:10～14:20 休憩
- 14:20～14:45 **講演1「交河故城と高昌故城—シルクロードの真珠—**  
王 霄飛(中華人民共和国・新疆ウイグル自治区トルファン地区文物局 局長)
- 14:45～15:10 **講演2「シルクロード—対話と協力の道—**  
ドミトリー・ヴォヤーキン(カザフスタン共和国・考古学エキスパート代表)
- 15:10～15:25 休憩
- 15:25～16:55 **パネルディスカッション「シルクロードと日本」**  
司会 前田耕作(文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長、和光大学 名誉教授)  
パネリスト 藏中しのぶ(大東文化大学外国語学部 教授)  
西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー)  
森本公誠(東大寺 長老)  
吉田 豊(京都大学大学院文学研究科 教授)
- 16:55～17:00 **閉会挨拶**  
青木繁夫  
(文化遺産国際協力コンソーシアム 東アジア・中央アジア分科会長、サイバー大学世界遺産学部 客員教授)





JCIIC-Heritage

---

## 世界遺産としてのシルクロード

—日本による文化遺産国際協力の軌跡—

2016年6月発行

編集・発行：文化遺産国際協力コンソーシアム  
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43  
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 所内  
Tel 03-3823-4841 Fax 03-3823-4027  
E-mail consortium@tobunken.go.jp

制 作：株式会社クバプロ

---